特定非営利活動法人 鳥の劇場
〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野 1812-1
電話・ファックス　0857-84-3268
電子メール　info@birdtheatre.org
ウェブサイト　www.birdtheatre.org

特定非営利活動法人 鳥の劇場

2017年度 活動報告書

豊かさってのは金のことか? それだけじゃない?
じゃあ、もう一度考えよう。豊かさってなんだ?

撮影／池本喜巳

04 ご挨拶

05 活動報告1　年間プログラム

22 活動報告2　トリジュク

26 活動報告3　アウトリーチ活動

28 活動報告4　鳥の演劇祭10

32 活動報告5　じゆう劇場

36 活動報告6　鳥の劇場以外での上演

38 活動報告7　その他の活動

40 お客様の声

42 新聞記事

［資料1］鳥の劇場2017年度プログラム
観客アンケート集計結果

［資料2］鳥の劇場2017年度収支決算

表紙壁画／池田まき

2017年度の活動報告にあたり

いつも鳥の劇場の活動に、ご理解とさまざまなご支援を賜り、深く感謝申し上げます。2016年度の報告書作成がたいへん遅れた反省も踏まえ、2017年度の報告書は、例年よりもかなり早く作成いたしました。ギリギリの人数で事業を進めていることもあり、どうしても記録や報告が後回しになりがちなことについて、代表理事として大きな課題意識を持っており、改善に取り組んでいるところです。事業を通り過ぎる出来事として終わらせるのではなく、社会的な試行の積み重ねとして、その経過や成果の記録をしっかり残していくことは、芸術活動の社会的意義の重要性を主張するNPOとして、極めて重要なことだと認識しています。

今回の報告書は、今までで最もページ数の多いものとなりました。事業数が増えていることもその大きな理由ではあります。が、日付や数字的なデータばかりでなく、写真を増やすことで、実施の雰囲気を知ってもらうとともに、メンバーの振り返りなどを随所に織り込むことで、普段はあまり表に出ることのない現場の思いを、みなさんにお伝えできたらと考えた次第です。読んで楽しい活動報告書になっていると思います。時間のある時に、少しゆっくりご覧いただければと思います。

最後に一つお願いです。52項をご覧いただければおわかりいただける通り、2017年度はサポーター寄付がたいへん少ない年になりました。前年度に施設改修のお願いを、広くさせていただいたので、その揺れ戻しのようなことかと認識しています。が、本書でもおわかりいただける通り、ますます積極的に多様な活動を展開しており、資金的にはあいかわらず非常に厳しい状況です。ご寄付いただいているみなさんに、お礼を申し上げるとともに、今年度も是非、寄付をご検討くださいますよう、あらためて深くお願い申し上げます。また、寄付の輪が一層広がるよう、ご協力いただければ幸甚です。

今後とも鳥の劇場の活動を応援してくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

鳥の劇場代表理事　中島諒人

活動報告 1

年間プログラム

鳥の劇場は〈創る〉〈いっしょにやる〉〈招く〉〈試みる〉〈考える〉の五つの柱を持って運営してきました。さらに2017年度から〈若手演劇人の成長サポート〉もさらに加え、地域の中で、日本の中で、世界の中での、この場所の意味と役割を模索しています。

※〈招く〉は「鳥の演劇祭」として実施しました。
今年度は〈考える〉の実施はありませんでした。

創る プログラム

『イワンのばか』
『NIPPON･CHA! CHA! CHA!』
『三文オペラ』

いっしょにやる プログラム

上演ともっと深く出会うための戯曲の講座

『トルストイ「闇の力」を読む』
『如月小春の「DOLL」を読む』
『ブレヒト「例外と原則」を読んで演じよう!』

子どものための小鳥の学校

発表公演
『少年たちとおじさんたちの奇跡の生還』

試みる プログラム

高校演劇もっと盛り上げ事業 つくる高校生

前期：発表公演『春のめざめ』
　　韓国の青少年劇団「コドゥンオ」との交流
後期：発表公演『わが町』

劇場で働く人たち

若手演劇人の成長サポート

若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業

滞在制作と上演『反復と循環に付随するぼんやりの冒険』、研修

招く プログラム

鳥の演劇祭10

【後援】鳥取県　鳥取市　鳥取県教育委員会　鳥取市教育委員会　NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会
　　鳥取大学地域学部附属芸術文化センター　新日本海新聞社　株式会社ふるさと鹿野
【助成】平成29年度文化庁 劇場･音楽堂等活性化事業　公益社団法人ごうぎん鳥取文化振興財団
【実施回数】上演／7公演　25回　　上演以外／8事業　104回

創る
プログラム

イワンのばか

【演出ノートより】

障がいのある人といっしょに芝居を作る「じゆう劇場」プロジェクトの昨年度公演で、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を扱いました。その世界では、りんごはとても重要な役割を持っているので、写実的模造的りんごでなく、大きいものを手作りしました。その同じりんごが、この舞台にも現れます。

はじめは稽古の中での仮のものと考えていて、本番に向けて別のものに差し換えるつもりでした。ある芝居の中での象徴性を担った小道具が、別の芝居の中に現れるのは変だからです。でも結局差し替えはやめました。トルストイと賢治がつながっていることを知ったからです。賢治は童話集「注文の多い料理店」広告文で以下のように書いています。

『イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遥かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。』

「イヴン王国」がイワンの国です。トルストイは1829年生、1910年没。賢治は1896年生、1933年没。1885年に書かれた「イワンのばか」が日本語訳されたのが1902年。賢治はこの物語を読み、彼の夢想の理想郷イーハトーブに共通する何かを、イワン国に見ていました。

改めて思い至ったのは、私がこれら二つの物語を取り上げた理由でした。両方とも「幸福」について考えているのです。賢治は死者の目、宇宙からの目で、人の生を眺めようとしました。そのために「銀河鉄道」が必要でした。トルストイは、金や暴力で人が人を支配することのない世界を思い、そのために「ばか」を、常識を外しひっくり返す道具立てとして用いました。実現できないかもしれないが、それに向かって努力すべき「幸福」を物語に託し、実際に社会が少しずつでも変わっていくことを願いました。

内心の自由、表現の自由を侵すような法律が成立しようとしています。憲法を変えようという話が、国会からでなく行政府の長から出てきました。2020年という期限まで定めてです。今までの「幸福」をより良いもの、より本質的なものにしていくことと合わせて、築かれてきた「幸福」を守ることも考えなければなりません。一人ひとりは微力だが無力ではないのです。思えば、そもそもこの物語を舞台化しようと思ったのは、イワンの国を破壊することを目論み、頭で稼ぐことの価値を語る悪魔の姿に、我々の国の現首相を見たからでした。

（演出家／鳥の劇場芸術監督　中島諒人）

■原作／L.トルストイ
■台本／永山智行（劇団こふく劇場）
■演出／中島諒人
■出演／イワン:中川玲奈　セミョン、小悪魔10431号:中垣直久　タラス、小悪魔27062号:高橋等　マラーニャ:山口晃三朗　老悪魔、ばあちゃん馬:齊藤頼陽　イワン国王妃、タラスの妻、小悪魔35903号、カラス:村上里美　イワンの父親、イワン国大臣:中村きくえ　イワンの母親、豚:赤羽三郎　セミョンの妻、鳥、豚:安田茉耶　タラカン国大統領:武中淳彦　ばあちゃん馬、じいちゃんヤギ:藤岡千夏　ニワトリ、じいちゃんヤギ:山口大輝　カラス、ニワトリ:國石百加　打楽器演奏:辻口実里
■スタッフ／舞台美術:カミイケタクヤ　衣装デザイン・製作:安田茉耶　衣装製作:増川智子　大道具製作:赤羽三郎　小道具製作:辻口実里　お面製作:中垣直久　作曲:武中淳彦　編曲:原伸弘（オハラ企画）・松本智彦　照明:生田正　音響:原伸弘（オハラ企画）舞台監督:原口佳子　英語字幕製作:澤田晶子・増川智子　制作:鳥の劇場

■日程／2017年5月19日（金）・20日（土）・21日（日）・22日（月）・25日（木）・26日（金）・27日（土）・28日（日）
■上演回数／8回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計840人

【学校招待公演】
■日程／2017年5月16日（火）・17日（水）・18日（木）
■上演回数／3回
■招待校／鳥取市立鹿野小学校・鳥取市立鹿野中学校・湯梨浜町立北溟中学校
■来場者数／計319人

創る
プログラム

NIPPON・CHA! CHA! CHA!

【演出ノートより】

どうも2020年東京オリンピックがピンと来ない。招致の騒ぎから決定の過程、その後のドタバタを見ながらモヤモヤしていた。時代遅れの国威発揚、不況脱却のための起爆剤的期待、原発の不安の払拭（あるいは糊塗）、東京という巨大都市のさらなる発展、その発展が沈滞する地方におこぼれする期待などなど。違和感はそれだけではない。もっときっとある。モヤモヤモヤ。そんな折、この戯曲のことを思い出した。20年以上前に読んで内容は全く覚えていなかった。印象的なタイトルだけが頭の端に残っていた。

演劇をやる人間は、わからないことについて、演劇を作ることを通じて考えたいと考える。わかったことを演劇を通じて語るのだと、多くの人が思っておられるかもしれない。が、実はその逆。わかったことを伝えるなら、わざわざ演劇はいらない。ただそのまま語れば良い。漠然とした「わからないこと」を分析し、稽古を通じて「よく考えればわかること」をそぎ落とし、「本当にわからないこと」を厳密に発見し、観客と共有する作業が、演劇づくりだ。

『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』の発表は1988年。高度経済成長の前段階からの日本人や社会を、1964年の東京オリンピックを縦糸にして見つめ、その盛り上がりが何だったかを、1980年台後半のバブル経済真っ只中という別の騒ぎの高みから捉えようとしている。20年以上の時を隔てた二つの時代が互いを照らしあって、その差異を際立たせている。また一方で、時代を超えて変わらない日本人の姿をとらえようともしている。時代や社会への秀逸な認識があふれている。1956年生まれの作者が、30年と少しの人生の中で体験した社会の大きすぎる変化が、冷静に、かつ愛情を込めて描かれている。

が、今上演する時、このままでは足りない。時代の空気を濃く孕んだテクストだけに、同時代の文脈が共有されない場では、観るものとの関係が上手に生まれない。誤解して欲しくないのだが、このテクストが語る内容は、時代を超えた普遍性を持っている。だから上演をするのだ。が、今の時代の中で素朴に提示しても、その普遍性がなかなか伝わりづらい。

戯曲という文学手法は、書かれた時代の空気に浸されている。その浸潤の度合いは、小説よりも深い（と私は思う）。入場料を払った観客と直接対峙するからだろうか。それは戯曲の強みであるが、同時に弱みでもある。1960年代始め、1980年代後半、そして現在あるいは2020からの視点。三つの層をあちらからもこちらからも透かしながら、変わったこと、変わらないことを整理し、21世紀前半の我々の社会における巨大国家プロジェクトの意味や無意味、さらにはもっと遠い過去についても考えることが、今回やりたいこと。

もう一つ、作者が願っていた人間の未来像も考えたい。作者は時代の寵児として20世紀の終わりを生きた。拡大や進歩、成長という近代の呪縛、それを生む国家というくびきから自由になって、個人個人が自立した新しい生き方を発見していくこと。外来のものを追っかけるばかりで、結局いつまでも「からっぽ」の自分を充たす何かを、ナショナリスティックなものでも観念的なものでもなく生活レベルでつかむこと。グローバル化の負の側面が足元に潜み来る中で、その必要は発表当時よりも切実になっている。

（演出家／鳥の劇場芸術監督　中島諒人）

■作／如月小春
■演出／中島諒人
■出演／ヨシダ・カズオ:中垣直久　アキコ、タケシタ:あべゆう（劇団こふく劇場）　オオヒラ:高橋等　ハナコ:たきいみき　サトウ君:村上里美　タナカ君:安田茉耶　フクダ:齊藤頼陽　ミキ:山本芳郎（劇団山の手事情社）　スズキ先生:新倉健　キシ:大川潤子　ウェイトレス1:國石百加　ウェイトレス2:藤岡千夏
■スタッフ／舞台美術:カミイケタクヤ　舞台美術助手:竹腰かなこ・武智奏子（四国学院インターン）　衣装:安田茉耶　照明:生田正　音響:原伸弘（オハラ企画）　舞台監督:中井尋央（ステージワークURAK）　舞台監督助手:近藤丈雅（四国学院インターン）　作曲:武中淳彦　編曲:原伸弘（オハラ企画）　字幕翻訳:藤原葉　日本語字幕操作:三好樹里香（四国学院インターン）　英語字幕操作:大森那津実（四国学院インターン）　制作:鳥の劇場

■日程／2017年9月8日（金）・10日（日）
■上演回数／2回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計302人

創る
プログラム

三文オペラ

【『三文オペラ』初演にあたって】

二束三文という言葉があるように、三文とは価値なしの意味。三文芝居となると、インチキでだめな芝居。『三文オペラ』は、「オペラ」という高級な娯楽に、「三文」とつけたところに、作者ブレヒトの皮肉や挑発がある(「乞食オペラ」という原作はあるのだが)。

ブレヒト(独 1898-1956)は、演劇の娯楽性を利用しながら、現状を振り返る道具とすることを考えた。本作はその中でも代表作。発表は1928年。お金が全てを支配する社会、第二次産業が衰退し第三次産業にシフトしつつある状況の中、なりふり構わず立身出世しようとする手仕事階級の姿を、強盗や殺人を繰り返す犯罪者に重ね、さまざまな悪辣な人々も含めながら、世界の過酷な現実を容赦なく浮かび上がらせる。

今回、ものすごく考えたのは、どう上演するか。非常に有名な作品。国内でもいくつもの上演例があり、世界的には言うまでもない。他と同じことをやっては、せっかくがんばる意味がない。

銀行のロビーコンサート、銀行店舗内での上演というのがたどり着いた結論。ちょっとつじつまの合わないところも出てくるだろうが、それで鮮明に浮かぶものがあるなら突き進んでみようと思い、稽古を始めた。お金というのは、物やサービスの交換のための黒子的媒介者のはず。なのだが、時に神となり、時に生殺与奪の武器となり、人を狂わせる麻薬ともなり、場合によっては性的な魅力さえ発する。貨幣という妖怪のような存在を吸い上げ吐き出す銀行という場が、芝居の展開と響きあいながら、実に多様に現代を浮かび上がらせると思えて、このアイデアで行くことに決めた。

初演の90年前、ベルリン。第一次大戦の敗北による巨額の賠償金。ハイパーインフレ。世界史の教科書で見た無価値化した札束を積んで遊ぶ子供の写真が印象深い。自信の喪失、厭世的気分。未来が見えない、未来から目を背けたい。刹那的享楽への逃避。アメリカがそれを裏で支える。敗戦という特殊事情が生んだ当時のドイツ特有の状況かと思っていた。が、我々の現在と本当に無関係か。膨大な借金、閉塞感、破滅の予感を確実に感じながら転がり続けるしかない空虚感。自暴自棄の感覚。勝ち組、負け組、拡大する格差。わかりやすい世界認識への傾斜、強さへの憧れ、他者への優しさの欠如。社会的公正や正義、模索されてきた人間的価値への根本的不信。ちゃぶ台返し的破壊衝動。歴史は繰り返す。が、決して繰り返してはいけないことがある。

音楽のことにもふれなければならない。鳥取出身のオーボエ奏者、松田素子さんとは、作曲家の新倉健さんを通じて出会った。彼女がドイツ、ブレーメンを拠点にやっている木管トリオ、ココペリ(ファゴットはマーチンさん、クラリネットはナーヨンさん。マーチンさんはブレヒトと同郷のアウグスブルク出身)の音の素晴らしさに惚れ込んで、ブレヒト、ドイツつながりで出演をお願いした。いつもピアノを弾いてもらっている渡邉さん、今回初めてのおつきあいの太田さんにもがんばっていただいた。

台本も楽譜も、それだけで独立した何かを語っているように思われがち。だが、それが本当に胸襟を開き生きた言葉を語り始めるのは、演じ演奏する人間たちの、明確なイメージやチームワークがあってのこと。俳優たち、演奏家たちの技量、集中、努力に、演出家として敬意を表したい。

今回は、俳優たちがたくさん歌っている。楽譜的正しさからは逸脱したり足りない部分も少なくないと思う。が、「二束三文のオペラ」である。ご寛恕いただきたい。と言いつつ、俳優が歌う=語るのでなければ、達成できない演劇的地平があり、音程的な正しさなどいかほどのものか、というのが実のところの本心だ。

寒さの中足を運んでくださった観客の皆さん、本当にありがとうございます。人口最少県鳥取、その中山間地、二月、寒い劇場で、現在の国家、世界について考える。巨大さや困難を前にして、あまりにもささやかな営みですが、観客の皆さんの熱に支えられて我々は活動を続けています。我々は全力ですが、客観的に見れば本当にささやかな営みだと思います。が、この場所からしか見えない厳しい現実があり、この場所でしか感じることのできない希望があります。ともに我々の活動の源泉です。いつも本質を考えようとすること、どんなにささやかであっても戦いをやめないこと。タフにしたたかに生きたブレヒトもそんなことを思っていたのじゃないかと考えています。終演後に色々感想など聞かせていただければありがたいです。

(演出家／鳥の劇場芸術監督　中島諒人)

■原作／ベルトルト・ブレヒト
■翻訳／谷川道子
■台本・演出／中島諒人
■音楽／クルト・ヴァイル
■トランスクリプション／武中淳彦
■出演／メッキース、銀行員:齊藤頼陽　ピーチャム、子分、警官:中垣直久　ピーチャム夫人:中川玲奈　ポリー、銀行員、乞食:村上里美　警視総監、フィルチ、子分、銀行員:高橋等　警視総監の娘ルーシー、銀行員、乞食:安田茉耶　ジェニー、銀行員、乞食:大川潤子　娼婦、銀行員、乞食:國石百加・藤岡千夏・後藤詩織　警備員:赤羽三郎
■音楽演奏／アンサンブル・ココペリ　ob:松田素子　cl:ナーヨンチャン　fg:マーティンヤーサー　sax:松本智彦　pfI:太田紗都子　pfII:渡邉芳恵
■スタッフ／舞台美術デザイン:中島諒人　照明:生田正　音響:原伸弘(オハラ企画)　衣装:安田茉耶　舞台監督:岩崎健一郎　舞台監督助手:成瀬望　演出助手・日本語字幕:浜田連珠　歌唱指導:西岡千秋　録音協力:西尾悦子(ピアニスト)　大道具製作:株式会社ながお　英語翻訳:原田武長　英語字幕:増川智子　制作:鳥の劇場
■日程／2018年2月17日(土)・18日(日)・23日(金)・24日(土)・25日(日)
■上演回数／5回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計740人

関わったスタッフによる振り返り

『三文芝居の音楽』に就いて

元来『三文オペラ』は、J.ゲイの古典的作品『乞食オペラ』を下敷きにしていて、こちらがリュリやラモー、ヘンデルなど当時のバロックオペラを揶揄、嘲笑している事を踏まえ、それを踏襲しパロディとして見事に実在化…と云う二重性を根本に抱えて居る。コミカルに語られテムポ良く運ばれる劇中、作者ブレヒトの毒舌が簡単に気付きはされるものの、いったいどこにその鉾先が向けられているのか?が初見の観客=聴衆には解りにくいかもしれない。

更に物語が、バラッドオペラ風にロンドンの下町を舞台に繰り広げられるのを尻目に、バンジョー、ハワイアンギター、サクソフォンといった楽器がブルースを、タンゴを奏で、1920年代の雰囲気を醸しナツィスに「頽廃芸術」の烙印を捺された猥雑な音楽が響きわたる、声高に…。この辺りの倒錯交錯がそもそもの混沌とあいまって更なる複雑さを与えている。

しかもゴキゲンな舞台を貫く数々の歌;独唱・重唱・合唱が「これでもか!」とばかりに様々なテクストを撒き散らし、そのこだまは一層深く轟いて行く…。

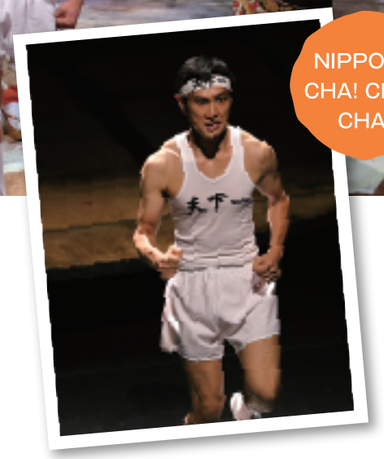
これはもう、プロパガンダだ、デカダンスの。こうやって小さな、低い声が徐々に蒐められ訴えられ、しまいには王宮に迄拡声され届けられる、馬上の使者によって。

今回私は、鳥の劇場版の舞台化にあたって実に23もの楽器の為に書かれたウ゛ァイルのスコアを、心ならずもトランスクリプションと云う形で6つの楽器に集約した。木管四重奏;オーボエ、クラリネット、サクソフォン、ファゴットである。原曲にないオーボエ・ファゴットはドイツから参加してくれたアンサンブル・ココペリをいかすため。また,鳥劇から演奏に唯一参加した松本智彦君のサックスはソプラノ、アルト、テナー三本の楽器の持ち替えだった。2つの鍵盤楽器;ピアノ、電子ピアノは県勢、渡邊芳江、太田沙都子両氏に担当して頂き、特に後者には、電子楽器の「安直さ」「胡散臭さ」を逆手に取り、ラッパや太鼓の音を多用してこのキャバレー=レヴ゛ューへの華と仰いだ。

そして最大の腐心は、谷川道子氏訳(光文社古典新訳文庫・刊)を底本としつつ舞台に載せる為行った、特にソングなど歌詞の大幅な加筆修正で、個人的にも全く慚愧に堪えない所だったが、公演初日に向け来鳥された谷川先生から思いがけなくご快諾を頂いて安堵した次第、ここに掲げる事叶わなかったこの他多くのキャスト、スタッフそして関係の方々に深く感謝しつつペンを措く事とする。

武中淳彦

イワンのばか



NIPPON・CHA! CHA! CHA!

三文オペラ

いっしょにやるプログラム

上演ともっと深く出会うための戯曲の講座

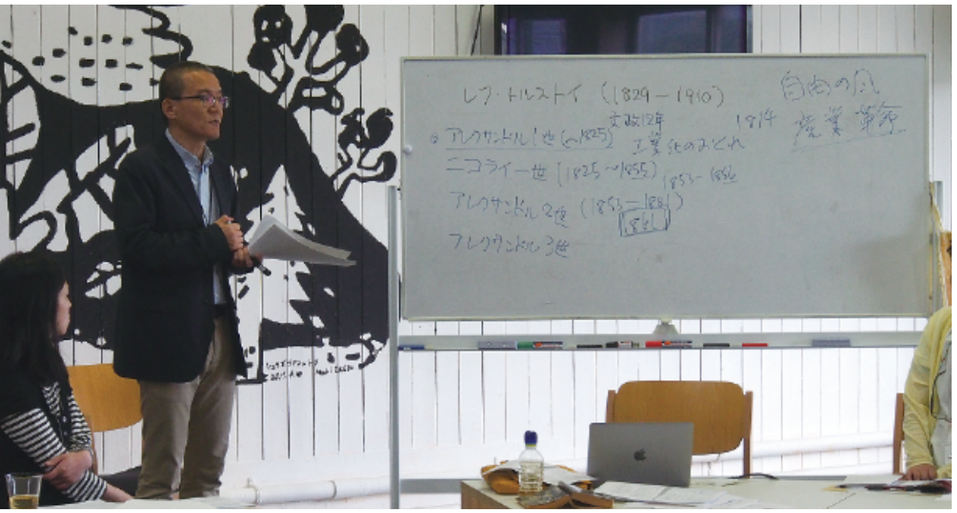
各公演事業のプレイベント的な意味もあわせ持つ、少数参加によるワークショップ的事業。上演戯曲や同じ作家の別戯曲などを取り上げて実施。

作品が生まれた時代や社会状況などについて解説を行い、参加者全員で戯曲を声に出して読んだり、少し演じることにも挑戦してもらいました。

『如月小春の「DOLL」を読む』

如月小春さんは、1980年代から活躍を始め、2000年に44歳で急逝するまで、多方面で旺盛な活動を続けた演劇人です。社会が豊かになり、とんでもない速度で激烈な変化を遂げる20世紀末の日本、人々、家族、生活を、独特の優しさと冷徹さで見つめ、多くの魅力的戯曲を残しました。今回取り上げる「DOLL」は、女子高校生の視点から時代への違和感を描いた、一見小ぶりですが鮮烈な批判力を秘めた作品です。参加者のみなさんと声に出して読みながら、作品の面白さを探ります。また、社会の変化と、その中に生きる個人との影響関係を探求している前田雅彦さんとともに、彼女がとらえようとした80年代日本についても考えてみようと思います。

■原作／如月小春
■講師／中島諒人・前田雅彦
■日程／2017年8月5日（土）
■会場／しかの心（鳥取市鹿野町鹿野1809-1）
■参加者数／16人



『トルストイ「闇の力」を読む』

トルストイは戯曲も書いています。「闇の力」は、1886年に書かれた代表戯曲です。経済システムの変化にほんろうされた下層階級の人々が、貧困や差別、教育のなさにより、非人間的行為を繰り返します。とても重く暗い作品です。多少説教くさくもあります。全体の筋を追いつつ、いくつかのポイント部分をじっくり読んでみます。合わせて19世紀後半のロシアの社会状況、同時代の作家、日本の状況などもざっと見てみます。昔のロシアの重くて暗い作品という類型的理解を少し超えて、作家の思いに可能な限り寄り添いながらテクストに出会うことを目指します。

■原作／L.トルストイ
■講師／中島諒人
■日程／2017年5月13日（土）
■会場／鳥の劇場
■参加者数／16人

『ブレヒト「例外と原則」を読んで演じよう!』

お金持ち、さまざまな働く人、警察官、裁判官などいろいろな人々の思惑が交錯するこの短編は、社会の問題点について、演じることを通じて、みんなで考えようといういわゆる「教育劇」です。「教育劇」などと聞くとかたい感じがしますよね。でもそこはブレヒト先生、とてもシャープでおもしろいお芝居です。演じて楽しみましょう。

■原作／ベルトルト・ブレヒト
■講師／中島諒人
■日程／2018年1月13日（土）
■会場／鳥の劇場
■参加者数／15人

いっしょにやるプログラム

子どものための小鳥の学校

小鳥の学校は演劇教室でなく、〈自分で考える、行動する子ども〉を目指す創造的な学びの場です。2010年度から毎年、子どもたちの現在を踏まえ、内容を変えながら継続して実施しています。

8回目の2017年度は、前回に続き「やりたい物語をみんなで台本にしてそれをみんなで上演するぞ!」と募集をかけ、定員20名に対し19名の応募がありました(小5=4名、6年=8名、中1=4名、中2=2名、中3=1名)。初参加9名のうち1人は県外から参加。

■対象／小学校5年生～中学校3年生
■講師／Yoo Taehoon(パフォーマー)・大岡淳(劇作家)・
上田假奈代(詩人)・目黒大路(舞踏家)・鳥の劇場
■日程／2017年7月8日(土)～2018年3月25日(日)
※実施日数／24日間
■参加者数／19人

【発表公演】『少年たちとおじさんたちの奇跡の生還』
■構成・演出／「小鳥の学校」受講生と中島諒人
■出演／「小鳥の学校」受講生
■日程／2018年3月24日(土)・25日(日)
■上演回数／2回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計317人

関わったスタッフによる振り返り

参加条件が「やりたい物語を持ち寄る」であるため、それぞれやりたい物語がちがうところからのスタート。演劇ゲームやグループワークを通じて、答えを大人に求めるのではなく、少しずつ自分たちで考えを伝え合うようになっていった。演目やタイトルなど何かを決定する局面では、中学生が進行し、小学生の意見も拾い上げ、まとめていく姿が見られた。配役決めでは、それぞれの個性が発揮できるように、2演目どちらかで必ず見せ場があるように、話し合っていた。自分たちでスケジュールを見直し、自主練日も5日追加した。台本づくりでは、作家チームと編集チームで書き上げ、実際に演じながらセリフをふくらませていった。衣装、音楽、舞台美術も子どもたちが考え、鳥の劇場の大人たちがサポートした。外部講師としてアメリカ在住のパフォーマー、大阪の詩人、静岡の劇作家、地元在住の舞踏家を招き、多彩な取り組みができたため、子どもたちは楽しみながら、だんだん自己開示できるようになり、受講生同士が互いを受け入れられるようになった。

〈つくる高校生〉との交流も組み込み、朝のウォーミングアップ、英語劇ワークショップをいっしょに行った。発表公演も互いに観劇した。自分たちより「ちょっと上」の高校生と接することは、大人とはまたちがう刺激があるようで、小中高の連携は来年度も組み込んでみたい。

発表公演は両日ともほぼ満席。上演中は演技だけでなく、楽器演奏、音響照明も操作する。その様子が観客に伝わるよう、舞台上に操作卓を設置した。全体進行も子どもたちが行い、自分たちがどうやってつくりあげてきたか紹介し、観客との質疑応答も行った。一人一人、自分の言葉で語る姿に、それぞれの成長を感じられた。

中川玲奈

試みる
プログラム

高校演劇もっと盛り上げ事業 つくる高校生

違う世界、違う時代や状況に生きる人を想像し、自分のこととして体に落とし込む力が演劇づくりには求められます。共演者と目標を共有し、役割を分担し、迷走や失敗を恐れず、辛抱強く作業する協働する力も求められます。グローバル化し、世界が緊密につながっていく状況の中、あるいは既存の価値観がどんどん通用しなくなり更新を余儀なくされる状況の中、演劇づくりの過程で錬磨される能力は、未来を生きる力としてそのまま使えるものです。

この事業は、次代を担う高校生を対象に、かなり本格的に演劇づくりの体験をしてもらい、それを通じて、未来を切り開いていくためのさまざまな力を身につけてもらおうとするものです。

前期 『春のめざめ』を劇作家・演出家の松井周さんと一緒につくり「鳥の演劇祭10」で上演

■対象／演劇に関心のある高校生
■日程／2017年7月1日(土)～2017年9月17日(日)
※実施日数／34日間
■参加者数／11人

【発表公演】『春のめざめ』
■原作／フランク・ヴェデキント
■構成・演出／「つくる高校生」前期受講生と劇作家 松井周
■出演／「つくる高校生」前期受講生
■日程／2017年9月16日(土)・17日(日)
■上演回数／2回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計139人

後期 ソーントン・ワイルダーの名作『わが町』を鳥の劇場で上演

副芸術監督で俳優の齊藤頼陽を中心に、戯曲の読み解き方から始め、さまざまに演技を工夫していきました。上演の後にはこの創作を通じて何を感じ学び取ったかを、観客の前で話し、事業の意味を確認する場ももちました。

■対象／演劇に関心のある高校生
■日程／2017年11月18日(土)～2018年3月25日(日)
※実施日数／38日間
■参加者数／9人

【発表公演】『わが町』
■原作／ソーントン・ワイルダー
■構成・演出／齊藤頼陽
■出演／「つくる高校生」後期受講生
■日程／2018年3月24日(土)・25日(日)
■上演回数／2回
■会場／鳥の劇場
■来場者数／計161人

関わったスタッフによる振り返り

高校演劇もっと盛り上げ事業「つくる高校生」の前期と後期、それぞれ振り返りたいと思います。
前期、新たに始まる事業ということで僕はドキドキの「つくる高校生」。参加した高校生たちは、もちろんドキドキだったでしょうが、作品制作の中で自分の新しい表現に出会えたようで、受講生各々に深い体験になったようです。

2017年度から始まった本事業。これまで高校生との関わりはあったものの、応募があるのか、学校と稽古の兼ね合いはどうするのかなど、担当の僕はいろいろ心配でしたが、そんな中、勇気ある高校生が11人、県の東部・中部の高校から集まってくれました。

前期の作品制作は「春のめざめ」、作品内容は思春期の男子と女子の青春残酷物語。演出は劇作家の松井周さんです。

松井さんは、高校生自身の言葉で相手とやりとりをする稽古を多く行いました。参加した高校生たちは、セリフを喋るときにまずキャラクターをつくって喋ってしまう傾向にありました。彼らには自分の言葉で相手とやりとりをする稽古は難しく、キャラクターで喋ってしまう癖と格闘していたようです。さらに、戯曲に書かれた思春期の多感な部分を表すことも難易度を上げ、稽古では「難しい」という言葉がよく聞こえて来ました。松井さんには辛抱強く指導していただきました。高校生たちも稽古を経て上演、高校生だったらためらうような場面もがんばって立派にやってくれました。こうして前期は終わり、続いて後期です。

再び高校生が集まってくれるか、やはりドキドキの後期でしたが、県東部の高校から9人の応募がありました。そのうち3人は前期に引き続き参加です。

後期はアメリカの名作戯曲「わが町」。上演後は、高校生たちから充実感が感じられました。作品制作を通して演技についての考え方を身につけたようです。

演技が上手くなりたいと参加してくれた高校生たちは、鳥の劇場の齊藤と一緒に作品制作を行いました。稽古ではお芝居をする前に細かく戯曲を読み解きます。学校で演劇部に所属する受講生も、部活では台本を細かく深く読み解くことがないようで、興味深く稽古を行っていました。高校生たちが作品制作を通して感じた・得た部分は、戯曲の読み方や演技の組み立て方など、人によって様々です。中でも演劇部に所属している受講生は、これから学校の演劇部の活動に活かしてくれる事と思います。

前期・後期ともに、高校生たちは上演時に思った以上にがんばってくれました。ただ、稽古の集まりが悪かったのは課題です。今回の「つくる高校生」は高校生の予定にいつも悩まされていました。高校生は多忙でなかなか稽古に全員集まらない、となると稽古も思ったように進められないという具合です。みんなが集まれば稽古がずんずん進んで、作品もさらに深まったかもしれません。次回に向けてどうしようかと考えていると、次の「つくる高校生」がまた始まります。ドキドキです。

中垣直久

韓国 安山 青少年劇団「コドゥンオ」との交流

「コドゥンオ」は、韓国京畿道安山市の安山文化財団がオーガナイズしている高校生の劇団。（安山文化財団とはBeSeTo演劇祭を通じてつながりました。）総勢22名が、鳥の劇場を訪れ、演劇を通じて鳥取の高校生と交流しました。

アニメやダンス、歌などポップカルチャーの分野では、驚くほどに同じ情報を共有している日韓の若い世代ですが、両国民を互いにどう見ているか（日本人観、韓国人観）となると、驚くほどに固定的で昔ながらの（好意的ばかりとは言えない）相互認識をもっています。日韓ともに劇場と演劇が仲立ちして高校生を集め、演劇を通じた交流を通じて、互いへの古い見方を打破し、未来の新しい糧とするのがこの試みです。2018年度以降も継続していきます。

【劇団「コドゥンオ」との交流ワークショップ】
■進行／韓国の劇団コルバンと鳥の劇場
■日程／2017年7月28日（金）
■会場／鹿野町中央公民館体育館
■参加者数／50人

【劇団「コドゥンオ」による上演】『TOY STORY』
■演出／ペク・スンファン
■出演／韓国 安山 青少年劇団「コドゥンオ」
■日程／2017年7月29日（土）
■会場／鳥の劇場
■来場者数／67人

関わったスタッフによる振り返り

「高校演劇もっと盛り上げ事業」は、「高校生が演劇を自分たちの力で構想し、創作する力を持ってもらうこと」、また「違う高校の子ども同士が交流し、一つの目標に向かって協働する場所を提供すること」を目的として、2017年度より始めました。一年を前期（2017年7月～9月）と後期（2017年10月～2018年3月）に分け、前期は岸田戯曲賞作家・松井周さんと一緒に『春のめざめ』を創り、「鳥の演劇祭10」で上演、韓国の高校生との交流も行いました。後期は鳥の劇場の劇団員と一緒に『わが町』を上演。

初年度の実施を終えて、今後の展望に明るいものを感じています。私が関わった「韓国の高校生との交流事業」と「わが町」について振り返り、次年度以降へと繋げていきたいと思います。

■韓国の高校生との交流事業

先方の申し出から始まった事業でしたが、「実施するからにはただの“交流”で終わらせてはいけない。」と意気込んでいました。しかし同時に、「（自身の経験や二国間関係の現状を鑑みて、）一体何が出来るだろう。」と不安になっていたのも事実です。

でもそれは全くの杞憂でした。初めこそ互いに緊張気味でしたが、時間が経つにつれ、アイドルやアニメのことを糸口にして会話を弾ませており、交流の意義を深く感じました。その様子を見守っていた先方の担当者からも「こういう形の交流がしたかった。来年度以降も継続していきたい。」と滞在中に話がありました。

個人の付き合いだと問題はないのに、そこに国家というものがチラついた途端に話が複雑になる。国家という枠組みを越えた一人の“人間”としての付き合いを実現したい。そのために越えるべきハードルは少なくないことも分かっています。関わっている人間の数で考えれば小さな交流かもしれません。それでも今回のような活動が、互いの悪いところをあげつらうばかりでなく、良い所を認め合える関係作りの一歩になると確信しています。

■わが町

自分たちで芝居を読解し組み立てられるようになってもらいたい。そのために少々難しくても構わないので、「古典」といわれるような高校生からは少し距離のある作品を題材にして、内容を深く考えていくようにしたい。こうした思いで後期の「つくる高校生」事業をスタートさせました。参加した高校生全員が「舞台に立ちたい」と考えていたので、私が演技を組み立てる上で気を付けていることをレクチャーしていく、「齊藤頼陽俳優養成塾」とでもいうような形の活動になりました。

「実際に演技するより前に、戯曲の読解、解釈をしっかりとする」、「具体的な演技のアドバイスはなるべくしない」という方針だったので、色々と苦労があったようですが、上演後に感想を聞いた限り、それぞれが大きな手応えを感じてくれたようでした。“個人の表現”という枠組みを越えて、同じ舞台に携わる共演者やスタッフの存在、届ける相手である観客といった、より広い範囲の認識を感じることができたという参加者もいました。これからの社会を担う世代の彼らに、こういった広い視点を感じてもらえたことを一社会人として嬉しく思っています。

問題点をあげるならば、練習時間の確保でしょうか。学校が違うのもあって、個々人の予定にズレが多く、本番直前まで全員が揃っての練習というのがほとんど出来ませんでした。ゆえに共通の理解が図りにくく、もどかしかった部分があります。こちらの予定の提示がアバウトだったというのもありますが、参加する高校生にもより高い意識を持って望んでもらいたいと感じています。

齊藤頼陽

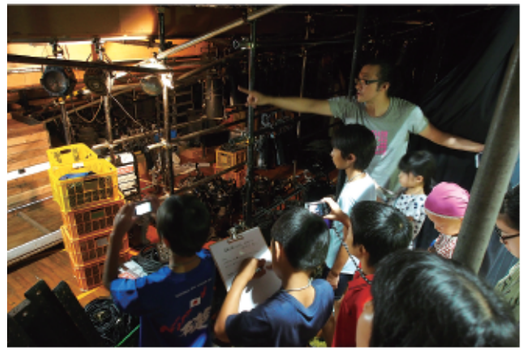
試みる プログラム

劇場で働く人たち

近年、子どもたちのキャリア教育の一環として、「職場見学」や「職場体験」の必要性がうたわれ、教育現場での実践も広く行われています。本プログラムは、単に「劇場での仕事を知ってもらう」だけでなく、「職業体験」ともなることを企図しました。

参加する子どもたちはグループになって劇場を見学し、さまざまなスタッフから、それぞれの仕事の説明を受けていきます。

劇場の持つ役割、劇場で働くということ、職業の多様性、仕事の意味や喜びについて理解してもらうことを目指しました。



■対象／小学校4年生～中学校3年生
■日程／2017年8月11日（金祝）
■会場／鳥の劇場
■参加者数／12人

関わったスタッフによる振り返り

劇場は全国にいろいろとあるが、当然そこには働いている人たちがいる。地域によって劇場の在り方は様々で、そこで働く人の人数や働き方も少しずつ違う。鳥の劇場で働く人たちがどんな仕事をしているのか?小学4年生から中学生までの子供たちに、夏休みの自由研究にもなる体験型の企画として紹介しながら、「仕事をする」という事の広く深い視点も捉えつつ、体験もできる企画として行った。参加定員は20名で募集した。

まず劇場の設備等の案内をしてから、2チームに分かれて各仕事場に移動し、それぞれの仕事を体験しながら説明を行った。そして昼食休憩後に短い芝居を創る体験をしてもらって、最後に振り返りとして感想などの発表を行った。他の公共ホール等で行われている「バックステージツアー」と違うのは、俳優や衣装、企画や運営、実際に演劇を創る過程の説明と実演をしたことだろう。これは鳥の劇場が、劇場の機能と演劇の企画制作・公演実施の機能を合わせ持っている事や、学校で行っているワークショップ等での実施ノウハウがあるから出来る特徴ではないだろうか。今後も継続的に劇場の社会的役割についてや仕事についての認知普及のため、この企画を継続していきたいと思っている。子どもたちに楽しんでもらいながら、かつ大人にも地域における文化的社会経済の中で、劇場が機能している部分は何なのかを、体験しながら知ってもらいたいと思っている。

畠中聡

若手演劇人の成長サポート

若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業

若手演劇人とともに演劇や劇場の社会的役割を考える企画。柱は二つ。一つは、2017年の利賀演劇人コンクールで優秀賞を受賞した松村翔子さんによる滞在制作と上演。

もう一つは、松村さんを含む若手演劇人の、演劇人としての将来ビジョンの披瀝と共有。社会とどのように関わり、どのように演劇や劇場の可能性を開拓していくかについて、議論や研修、発表などを行い、最終日には観客と研修の成果を共有しました。

■滞在制作日程／2018年1月20日(土)～2018年1月28日(日)
【発表公演】演劇ユニット・モメラス
『反復と循環に付随するぼんやりの冒険』
■作・演出／松村翔子
■出演／安藤真理・海津忠・黒川武彦・曽田明宏・西山真来・山中志歩
■映像／黒川武彦
■上演日／2018年1月28日(日)
■会場／鳥の劇場(スタジオ)
■来場者数／57人

■研修日程／2018年1月24日(水)～2018年1月28日(日)
■研修受講者／6人　松村翔子(モメラス 青年団演出部)・岩澤哲野(libido:)・柳生二千翔(女の子には内緒)・綾門優季(青年団リンク キュイ)・三浦雨林(隣屋)・堀川炎(世田谷シルク)
■ファシリテータ／中島諒人
■ゲスト講師／大谷燠(NPO法人ダンスボックス)・志賀亮史(百景社)
■協力／公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議

関わったスタッフによる振り返り

若手演劇人育成企画の制作を担当させて頂いています。私自身演劇制作を職業にしてまだ5年目、若手中の若手です。若手演劇人と聞くと「苦労の多い夢追い人」というイメージを持たれがちです。確かに苦労は多いですが。

私たちのいう演劇人はリージョナルシアター(地域の劇場)という考え方に基づいています。劇場が公的な資金を基に運営され、そこで働く演劇人は公的な責任を背負いながら演劇を創造し、地域に還元していきます。劇場は、市民が足を運び作品を通して自分たちの抱える問題や現代の社会について考える場となります。更に演劇人は劇場を飛び出し演劇の手法を使った様々な方法で直接的に地域社会との関わりを作り出します。やがて「劇場と演劇人」が「病院と医師」、「学校と教師」のように地域にとって必要不可欠な場所・職業となります。ここでの演劇人はいわゆる「夢追い人」ではなく職業としての演劇人なのです。

今回の研修に参加してくださった方々は、東京を中心にそれぞれ自分たちの団体を持って、または作ろうと活動をされています。が、自分たちの場所を構えて活動している人はいません。ではどうすれば自分たちの場所を持てるのか、場所をもって何をするべきなのか、どのように社会との関わりを作っていくのか、それについて先行事例を学び新たな事例を考えるのが今回の研修でした。研修を重ねるにつれて、少しずつ着実に彼らの目が社会に向かっていく様子が見て取れました。

現在、日本には私小説やエンターテイメントの芸術はあるが公共性を背負った芸術が少ないと言われています。実際に地域に根差した活動をしている劇団は数少なく、鳥の劇場のような事例も希少です。「演劇人」を誰からも認められる一つの職業とするために様々な方面から演劇の可能性を探っていく、そのために本企画を今後も継続していきます。

松本智彦

活動報告 2

トリジュク

【期間】2017年4月1日～2018年3月31日
【対象】鳥取市立鹿野小学校4年生・
鳥取市立鹿野中学校1年生・
鳥取県立青谷高校3年生
【会場】各学校

演劇の知恵を使いながら、地域の人材育成に関わり、長期的な視点で新しい地域づくりに貢献しようというのが、「トリジュク」です。「ジュク」は、英語とか数学などを学ぶ学校以外の場です。「トリジュク」は以下の決意と確信のもとに始めました。

1. 演劇的な知恵は、誰にとっても未来を生きるために必要なものである。
2. その重要さは、英語や数学などいわゆる教科の学びにも勝るほどだ。
3. 劇場が、その学びの発信地になり、実践を行うだけでなく、知恵の集積・研修や方法の練磨を行う場とならねばならない。

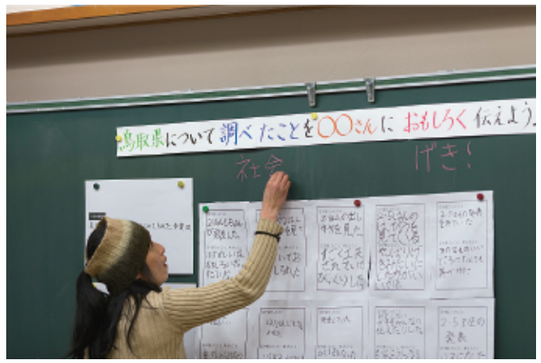
本格稼働一年目の2017年度は、学校教育の中に深く関わり、かなりの実践を行いました。学校現場にこれだけ関わりを持てたことは、2006年からの活動の蓄積の成果であり、ご理解、ご支援いただいだ関係者の方のお力添えによります。

また青山学院大学大学院苅宿俊文教授のアドバイスにより大きな力添えをもらいました。みなさんに感謝するとともに、期待に応えるべく研鑽を重ねています。

【実施日程】
■事業説明会／2016年12月19日(月)
対象:学校職員・地域の方など　会場:鹿野中学校
■オリエンテーション／
2017年4月17日(月)　対象:鹿野小学校4年生・鹿野中学校1年生
会場:鹿野小学校・鹿野中学校
2017年7月19日(水)　対象:青谷高校3年生　会場:青谷高等学校
■表現ワークショップ・省察／
2017年7月10日(月)～12日(水)　鹿野小中
2017年9月6日(水)・13日(水)・27日(水)　青谷高校
2017年9月19日(火)～21日(木)　鹿野小中
2017年10月4日(水)・11日(水)・18日(水)・25日(水)　青谷高校
2017年10月11日(水)・12日(木)　鹿野小中
2017年11月1日(水)・8日(水)・15日(水)・22日(水)　青谷高校
2017年11月20日(月)・21日(火)　鹿野小中
2017年12月6日(水)・13日(水)・20日(水)　青谷高校
2017年12月18日(月)～20日(水)　鹿野小中
2018年1月10日(水)・17日(水)・31日(水)　青谷高校
2018年1月22日(月)～24日(水)　鹿野小中
2018年2月19日(月)～21日(水)　鹿野小中
2018年3月19日(月)　鹿野小中
■教職員研修
2017年8月23日(水)・24日(木)

【主催】鳥の劇場運営委員会　鳥取県
【共催】鳥取市　特定非営利活動法人鳥の劇場
【協力】NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会
鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
【教育アドバイザー】苅宿俊文
(青山学院大学社会情報学部 教授)

※2018年5月26日　トリジュク成果報告会実施



関わったスタッフによる振り返り

鹿野小学校（現在は鹿野学園）4年生の回に、2017年度の後半から参加させていただきました。

社会科の授業にからめ、班ごとに分かれて、鳥取県の事を色々な角度から調べて、それをそれぞれ違った立場の人に伝えてみよう!伝え方は自由。という回の日。私がつかせてもらった班は、鳥取県の観光スポットを、日本語が話せる外国人に伝えてみる事に。鳥取県にちなんだキャラクターを登場させたりしながら、観光スポットをクイズにしたビデオレターを制作しました。

子供達について思うことが、表現に慣れている!

クイズの台本を書いて、ビデオレターの流れをまとめるのですが、ボケやズッコケなんかもちゃんとちりばめられており、配役を決め、練習するまでのスムーズさ!そしてその作品の撮影も兼ねてのみんなの前での発表も、難なくこなしていました。気持ちを表現するのが苦手で、クラスで何かするのが好きでなく、学校では本ばかり読んでいた小学生の私が、何かの間違いでいきなり放り込まれたら、ある意味恐ろしいクラスです。とてもついていけなかったろう。それほど、みんな楽しんで人前で表現できているのです。

なぜ楽しめているのか。それは受け止めてもらえる事が保障されているからなのかもしれません。変なことを言ってしまっても、間が空いてしまっても、逆に面白いことが言えても、どの状況でも何かしら受け止めてもらえるという安心感のようなものがあるのかなと思います。その土壌があると、自分の表現に対して、他人から評価されることに慣れて、自分の中で自己評価の他に、他人からの評価が加わって、自己の認識が変わってくるのだなあと思います。メタ認知というそうですが。
そう思ったら、確かに小学生の頃の記憶は、ほぼほぼ自分の中の自分の記憶のような気がします。メタ認知はできていなかったですね。（今できているかも怪しいですが。）

そんな恵まれた土壌で、のびのび育っている鹿学5年生さんたち（進級されました）と2018年度も関わらせていただいています。

どんな表現が飛び出すか毎回楽しみですし、この成長過程でどんな風に変わっていかれて、何は変わらないのか。も、目撃できたらいいなあなどと思っています。

後藤詩織

鹿野中学校と青谷高校を主に担当し、表現ワークショップの組み立てやファシリテーションを行いました。

鳥の劇場内で考えるだけでなく、青山学院大学の苅宿教授に、「ドリコマ」「逆転時間」のアプリなどのツールや、ワークショップの組み立て方を教えていただきました。これまで知らなかった教育学の方面から、ご助言をいただけたのは大きな収穫です。

鹿野中学校では、生徒達がどんどんワークに慣れていき、「出来そう」なことが「出来る」ようになっていきました。発想力、それを伝えることのできる表現力、グループで作品を作るため協働する力も身に付いたと思います。生徒達の可能性の広がりを感じました。特に印象的だったのは、最後にやった「ドリコマ」の授業の際、生徒自ら映像に生アフレコを入れていた場面です。生徒達が楽しみながら表現し、学んでくれていると実感しました。

青谷高校は途中からの参加でしたが、後半は藤岡と中心となって授業を組み立てました。高校3年生の彼らには、社会に出てからも役に立つような「協働」や「コミュニケーション」の力を培うことができればという想いで取り組みました。

初期は、なかなか生徒達に寄り添うことが出来ず、試行錯誤を重ねました。私と藤岡の二人組キャラクター「モモ&ナッツ」としてファシリテーターを担当するようになり、生徒達が表現をできるメニュー作り、場作りをより意識するようになりました。生徒達はどんな事を考え、何が嫌で、楽しめることは何か、生徒達に目を凝らして考えると、徐々にワークショップを楽しんでくれるようになっていきました。

「ドリコマ」アプリで作品を作った際には、積極的に意見を言ってくれるようになり、作品にこだわったり、チームワークが生まれたりと、生徒達の変化を強く感じました。彼らとのワークショップで私達も多くのことを学び、まさに「学びあいの場」になったと思います。トリジュクに関わる中で、自分が学生だった時にこんな授業があったら良かったのにと感じました。

楽しみながら「メタ認知」をし、「他者との関わり方」を知らないうちに学んでいく、表現ワークショップの取り組みが、他の学校にも広がっていくことを目指したいです。

國石百加

私は主に小学校と高校のワークショップに関わった。

小学校では、子どもたちと一緒にワークショップに参加して、子どもたちの様子を見たり、手助けをしたりしていた。

最初はワークショップに対して、困惑していた子どもたちも、回数を重ねるごとに段々と、内容を理解してくる。その様子を見ていると、子どもたちは授業のやり方に慣れて、笑顔が見えてきたり、積極的に意見を出すことも増えてきたりする。少し前まで、恥ずかしそうにして動かなかった子どもが、意見を出し、積極的に表現を行う。楽しそうにワークショップに取り組む子どもたちは、今まさに成長しているのだと感じた。

このトリジュクのワークショップは、慣れることがとても大事であるとされている。表現は身体を動かしたり、大きな声を出したりと、恥ずかしいと感じる場面もあるかもしれない。だが、その恥ずかしいと感じる気持ちを、慣れることや、周囲の友達が一緒にやることで乗り越えていく。そこから、違う表現、より大きな表現が子どもの内面から現れてくるのである。

高校のワークショップでは、小学校と違って照れや参加の拒否が顕著であった。年頃ということもあってか、あまり表現をしたがらなかった。だがそれは、自分が表現をすることが周りに受け入れられないと感じていたからではないか。そのような、他者を受け入れられない雰囲気を変えなければならなかった。

つまり、私たち外部の者が、彼らの表現や、やりたくない気持ちを受け入れることで、他者を受け入れられる雰囲気を作りだすことが、彼らの表現をうながすのだ。

この一年を通して、最初は自分がワークショップをやることが、誰かの成長につながると、考えたことがなかった。しかし取り組んでいく内に、完全に「誰かを変えること」はできないが、誰かを変える「きっかけ」になることがわかった。

藤岡千夏

連日ある国では、ある学校が不正に土地を手に入れ、それにある国の首相夫人が関与したのではないかという疑惑で騒いでいる。しかし問題はそんな疑惑よりも、その学校の教育方針の方ではないのか。その学校では幼児にある国の天皇の教育に関する言葉を暗誦させたり、ある国の首相を誉め称えさせたりしていたのである。幼児にだよ。

最近読んだ西原理絵子さんの絵本の中に、「戦場で一番こわいのは少年兵である。」ということばがあった。「何の疑問もなく、何の躊躇もなく人を殺すからだ。」そうだ。

さて、そんなことより「トリジュク」だ。そう、「トリジュク」なのだよ。私は昨年度、小四、中一、高三に関わったのだが、はっきり言って高三はキビしい。自分の興味のないことは、とことん無視するのだよ彼らは。まあ自分も高三の頃はそうだったから、仕方ないっちゃあ仕方ないかな。せめて高一だったら…かな?

私の担当した班にA君とB君が居た。二人はいつもいっしょだ。とにかくいつもじゃれ合っている。

「ドリコマ」を使った授業で、彼らは監督を希望した。C子はカメラマン、D子とE子は役者だ。階段を一段ずつジャンプした瞬間の写真をコマドリしてつなげると、人が飛行しているように見える。この日はそれを省察して、さらにグレードアップしようというのだ。何もヒントを与えないと、ただダベっているだけの班なので、「この飛び方、魔女っぽくねぇ?」と言ってみた。「じゃ、ホウキいるね。」D子が言った。窓から下を見てB君が「あ、庭に竹ボウキあんじゃん。おいA、取って来い。」A君「うっせバーカ。」D子「傘でもよくね?」するとB君はやにわに職員室に入り、T字型のホウキを一本借りてきた。D子「二本だよ。」B君「あ、そっか。」こうして撮影が始まった。普通のことである。でも私にとって普通のことではなかった。いつも何にもしない男子二人が動いたのである。積極的に。私の頭の中では例のリフォーム番組の「なんということでしょう」というフレーズがリフレインしている。

授業の最後にビデオで一人一人に感想を聞く。「今日、やってみて大変だったところを教えてください。」A君がニヤニヤしながら「B君が何もしないので僕一人だったので大変でした。」B君は半笑いで「A君が何もしなかったので大変でした。」よくある、同じ答えを繰り返すカエシである。でもA君は明らかなウソなのに対し、B君は余裕のあるウソに感じられた。「俺、今日、小道具探してきたもんね。」という自信からか「何もやってねーのはオマエじゃん!」的なツッコミ感を感じたのである。

A君とB君は誕生日が1日違いで、小中いっしょ、ずーっと親友。でもこの春から二人とも社会人。応援してるよ!!

高橋等

※「ドリコマ」とは…青山学院大学、苅宿研究室が開発したコマ撮り映像作成アプリ。
写真を何枚も撮影して、コマ撮り（ストップモーションアニメ）の作品を簡単に作成できる。

3 活動報告

アウトリーチ活動

劇場から出かけていき、本公演以外の形で、演劇を通じてみなさんのお役に立つのが、「アウトリーチ」です。「劇場や演劇が自分には全く縁のないもの」というのが、残念ながら世の中の大半の方の思いです。これを変えていくために、こちらから出ていくアウトリーチは、本当に大事な機会です。

演劇はなるほど面白い、演劇って使える、すごいなどと、感じてもらえるように可能な限り出かけています。おかげさまで、ずいぶんいろいろなところからご依頼いただけるようになっています。

■幼稚園／私立美哉幼稚園ワークショップ、鳥取市立こじか園読み聞かせ
■小学校／岡山市立朝日小学校「学校でひらく舞台芸術教室」（全校生徒を対象にした演劇やダンスの創造体験授業）、
鳥取市立鹿野小学校「Yooさん」ワークショップ、鳥取市立逢坂小学校学習発表会支援、
鳥取市立鹿野小学校学習発表会支援
■中学校／米子市立湊山中学校ワークショップ、湯梨浜町立北溟中学校、鳥取市立鹿野中学校総合科目ワークショップ
鳥取市立鹿野小学校学習発表会支援
■高　校／鳥取県立緑風高校社会人講師、鳥取県立鳥取西高演劇部指導、鳥取県立鳥取東高演劇部指導
■大　学／鳥取大学キャリアアッププログラム、鳥取大学授業、美作大学授業
■その他／私立赤碕こども園「アートで育てる」（職員向けワークショップ）、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館ギャラリー
「インクルージョンと演劇」セミナー・ワークショップ、とりっとダンスワークショップ、
読み聞かせグループ「さくらんぼ」（鳥取市鹿野町）、鳥取医療センター読み聞かせ、
鳥取県立鳥取盲学校「上田假奈代さん」とのワークショップ、鳥取県立白兎養護学校ワークショップ、
鳥取県立鳥取聾学校中学部ワークショップ

■2017年6月3日（土）・4日（日）　第70回鳥取県東部地区高等学校演劇発表会審査員:齊藤頼陽　会場／とりぎん文化会館
■2017年9月3日（日）　平成29年度倉吉未来中心　舞台スタッフ養成事業（高校生対象）での模擬本番の監修:中川玲奈
会場／倉吉未来中心
■2017年10月21日（土）・22日（日）　第17回全国障害者芸術・文化祭奈良大会・音楽劇『鳥の仏教』
総合演出・アドバイス:中島諒人　会場／奈良市ならまちセンター市民ホール
■2018年1月17日（水）　全国劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
「グループB　文化政策　創る劇場への進化ーその政策と創造のマネジメントを学ぶー」
講師／中島諒人　会場／国立オリンピック記念青少年総合センター
主催／文化庁・公益社団法人全国公立文化施設協会
■2018年3月28日（水）　シンポジウム「劇場と地域の未来」
講師／中島諒人　会場／東京藝術大学美術校地第1講義室

【学校などでの小作品の上演】
■とっとりの芸術宅配便『アナンシと5』
2017年6月30日（金）　会場／日野町立根雨小学校　来場者数／60人
2017年7月7日（金）　会場／鳥取市立東郷小学校　来場者数／40人

活動報告 4

鳥の演劇祭 10

【期間】2017年9月8日(金)～24日(日)
【会場】鳥の劇場(主会場)・しかの心・
鹿野往来交流館「童里夢」・
議場劇場(旧鹿野町議場)

【主催】鳥の劇場運営委員会　鳥取県
【共催】鳥取市　特定非営利活動法人鳥の劇場
【協力】NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会
鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
【助成】平成29年度 文化庁 文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業
【後援】鳥取県教育委員会　鳥取市教育委員会
駐大阪・神戸米国総領事館　新日本海新聞社
朝日新聞鳥取総局　山陰中央新報社　毎日新聞鳥取支局
読売新聞鳥取支局　産経新聞鳥取支局　日本経済新聞社
中国新聞鳥取支局　NHK鳥取放送局　日本海テレビ
BSS山陰放送　TSK山陰中央テレビ
共同通信社鳥取支局　時事通信社鳥取支局
日本海ケーブルネットワーク　FM鳥取・RADIO BIRD
【プログラム・ディレクター】中島諒人(演出家／鳥の劇場芸術監督)

上演プログラム

■鳥の劇場〔鳥取〕『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』
9月8日(金)・10日(日)　上演回数／2回　会場／鳥の劇場〈劇場〉　来場者数／計302人
■Barn Arts Collective(バーン・アーツ・コレクティブ)〔アメリカ〕
『セシリーの冒険』、オリジナルミュージカル映画『人生は素敵』、小編『ピノキオ』3本立て
9月9日(土)・10日(日)　上演回数／2回　会場／鹿野往来交流館「童里夢」
来場者数／計181人
■高瀬アキ+アンサンブル・ゾネ〔神戸〕『即興戯曲 飛ぶ教室は 今』
9月9日(土)・10日(日)　上演回数／2回　会場／鳥の劇場〈スタジオ〉　来場者数／計114人
■フィジカルシアターカンパニーGERO〔東京〕『言いたいだけ』鳥取バージョン
9月16日(土)・17日(日)　上演回数／2回　会場／鹿野往来交流館「童里夢」
来場者数／計87人
■TBTB／ビンビンファクトリー〔アメリカ〕『アザー・プレイズ:演劇とダンスの短編劇場』
9月23日(土)・24日(日)　上演回数／2回　会場／鳥の劇場〈スタジオ〉　来場者数／計136人
■ビスタキ〔フランス〕『コーペラツィア～道～』
9月23日(土)・24日(日)　上演回数／2回
会場／鹿野町内各所(城山神社鳥居前・観光駐車場・鳥の劇場裏駐車場など)・鳥の劇場〈劇場〉
来場者数／計238人

コミュニティで作られた作品

■余越保子×とりっとダンス　『サング・シカノ(鹿野の血)』
9月9日(土)・10日(日)　上演回数／2回　会場／議場劇場　来場者数／計107人
■じゆう劇場　『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの-2017』
9月16日(土)　上演回数／1回　会場／鳥の劇場〈劇場〉　来場者数／147人
■松井周×鳥取の高校生　『春のめざめ』
9月16日(土)・17日(日)　上演回数／2回　会場／議場劇場　来場者数／計139人
■鹿野タイムスリップツアー　『マサオの光る空』
9月23日(土)・24日(日)　上演回数／2回　会場／鹿野町内　来場者数／計164人

ワークショップ

■高瀬アキさんのワークショップに参加して、上演のお手伝いをしよう!　講師／高瀬アキ
9月8日(金)　対象／小中学生　参加料／無料　WS／1回　会場／鳥の劇場〈スタジオ〉
参加者／3人
■みんなでGO!合作5・7・GO!　講師／上田假奈代
9月16日(土)・17日(日)　開催回数／2回　会場／しかの心・鳥の劇場〈スタジオ〉
参加者数／計26人

講演

■このさい考えよう「教育」のこと　講師／浜本純逸
9月18日(月祝)　開催回数／1回　会場／鳥の劇場〈スタジオ〉　参加者数／35人

「子どものいちにち。」～みんなで観よう!創ってみよう!～

■みんなで観よう!鳥の劇場『どろぼうがっこう』
9月18日(月祝)　上演回数／1回　会場／鳥の劇場〈劇場〉　来場者数／249人
■みんなでつくろう!絵本からお芝居をつくろう!そして発表してみよう!
9月18日(月祝)　創作WS　開催回数／1回　会場／鳥の劇場〈劇場〉　参加者数／25人
発表公演　上演回数／1回　会場／鳥の劇場〈劇場〉　来場者数／41人

写真企画

■「小鳥の家族」　撮影／写真家 水本俊也
9月9日(土)・10日(日)・16日(土)・17日(日)・18日(月祝)・23日(土)・24日(日)　開催回数／7回
撮影場所／鹿野町内各所　参加者数／計21家族88人(17日と24日は撮影＋テント泊)
関連企画「小鳥の家族&鳥の俳優」写真展　開催期間／9月8日(金)～24日(日)　会場／鳥の劇場

イベント

■鹿野ぶらぶら町歩き
9月9日(土)・10日(日)・16日(土)・17日(日)・18日(月祝)　開催回数／5回
参加者数／計47人　会場／鹿野町内　協力／ぶらっとしかのガイドの会
■ナイトイベント、そしてテントで泊まれる!?
9月17日(日)・23日(土)　開催回数／2回　会場／鳥の劇場〈グラウンド〉
協力／あかり本願衆　酒うらら　鳥取天文協会　鹿野名画座
屋台村(23日のみ出張日本酒バー)・星空観望会・
野外上映会(鳥の劇場の作品上映)・テント宿泊
■パーティー
9月9(土)オープニング・パーティー
9月17日(日)ウェルカム・パーティー
9月24日(日)クロージング・パーティー
開催回数／3回　会場／鳥の劇場〈中庭〉

インターンシップ実施

■対象／四国学院大学演劇コース
■期間／2017年8月17日(木)～2017年9月26日(火)
■参加者／計12人

鳥の演劇祭10　来場者数合計(のべ)2,077人
(「ナイトイベント、パーティー、鹿野ぶらぶら街歩き」をのぞく)

参加者の声(研修日誌より)

◎主に舞台の仕込みや制作の仕事を手伝ったが、劇場で働くことの大変さを知ることができた。役者さんたちも稽古や公演だけが仕事ではなく、制作や舞台の仕事を全員で協力してやっていたのが印象的だった。また、プロの劇団の稽古を近くで見学することができたので、演技の勉強にもなった。
◎今まで自分の知らなかった音響、照明による演出の細かい効果の違い、実物で見て教えられるという現場的な環境で学んだ演劇の用語など、確実に研修前の自分と比べると知識が身についた。
◎演劇祭ということで色々な作品に出会うことができてとても良い刺激になった。
◎ウェルカムパーティーやナイトイベント、とても楽しかったです。GEROの方や鳥取の高校演劇部の顧問の方などとたくさんお話ができてよかったです。盆踊り、とても楽しかったです。鹿野の伝統に触れることができて良い経験になりました。

関わったスタッフによる振り返り

演劇祭10回、「よくまあここまで続いたなあ」と思います。私は当初、2年に一回の開催くらいのイメージを持っていました。それが、2008年から17年まで欠かすことなく10回です。過ぎた幸せだと感じます。私は大道具のスタッフで、俳優でもあるので、自分の公演をやりながら、各会場の舞台監督に求められることを手伝ったりしています。

演劇祭の始まりの頃は、私が中心で会場の準備をやっていました。初期よく覚えているのは、韓国のオテソクさんの劇団木花の『ロミオとジュリエット』です。セットを鳥取で作ったので、大量の資材を発注し、先方のスタッフが作業をしました。私もいろいろ手伝おうと、少し楽しみにしていました。けれど、彼らのチームはとても団結力があって、実のところあまり出る幕がありませんでした。また、平田オリザさんの青年団の『火宅か修羅か』のセットもとても印象に残っています。

上演会場は二つで始めました。2010年頃から「しかのごころ」、「交流館」、「議場劇場」などを加えました。仮設の劇場づくりは、とても工夫し、苦労したのを覚えています。「交流館」は、せまい空間を効率的に使わなければならず、操作ブースを客席の上に設けることにしました。「議場劇場」は、元の町議会の議場です。議員の席とかいろいろ撤去して空間を作り、天井に潜り込んで照明バトンを吊れるようにしました。この天井作業は、私のように小柄な人間でなければできない大変な仕事でした。

2017年の開催は、前年にリニューアルした劇場での初めての演劇祭でした。鳥の劇場の『NIPPON CHA! CHA! CHA!』は、舞台スタッフ総がかりの大掛かりなセットでした。フランスのサーカスには、始めスタッフでついていたのですが、なぜか出演もしました。地中海地方で使われる屋根瓦をさまざまに見立てる不思議なサーカスで、劇場周辺を巡って最後は劇場でフィナーレというものでした。その中で、瓦を畑で育てる人の役を依頼され、瓦に水をやったりしました。外国の演劇人にも劇場が褒められるので、それがうれしく、とても誇らしく思います。

赤羽三郎

10周年の節目を迎えた演劇祭。これまで以上に地域との連携を深め、地域の人も、遠くからの来場者も鹿野の町を楽しめるようさまざまな企画を用意した。

期間中は鳥の劇場の他にも、鹿野町総合支所の「議場劇場」や鹿野往来交流館「童里夢」も会場に、国内外のカンパニーの演劇・ダンス・サーカスなどの作品や、コミュニティで作られた作品の上演、ワークショップやトークイベントを行った。

地元ガイドの方の案内で散策する「鹿野ぶらぶら町歩き」、鹿野町のお年寄に取材して作り、鹿野町内各所で展開する「鹿野タイムスリップツアー」は定番となっており、鹿野の城下町を歩いて味わってもらえた。

より「祭」らしさを出すため、シンボルとして演劇祭の期間中、校庭のまんなかに、かつて鹿野盆踊りで使われていた櫓を建て、ポスターデザインの鳥の看板と合作川柳作品の幟で飾りつけた。
「ナイトイベント」の企画の一つとして、この櫓を中心に地元有志の方たちと季節外れの盆踊り大会を予定していたのだけれど、あいにくの荒天のため屋内での開催となった。外で櫓を囲んで踊ることはかなわなかったが、雨風の強い中たくさんの方にご参加いただき、鳥の劇場俳優・スタッフの生演奏による盆踊り大会は大いに盛り上がった。

「ナイトイベント」は、演劇祭をもっと多くの人に楽しんでもらいたいという思いから企画した。前述の盆踊りの他に、鹿野の星空を観察する「星空観望会」、鹿野地ビールや日本各地の日本酒を楽しめる「屋台村」、車で来てもお酒を楽しむことができるように「テント宿泊」など、鹿野の夜をゆっくりと満喫できる仕掛けを用意した。新しい試みはまだまだ試行錯誤な部分も多かったが、手応えも感じられたので、これからも地域の人びとや観客・来場者の方達と共に鹿野ならではの「鳥の演劇祭」を発展させていきたい。

生田正

5 活動報告

じゆう劇場

■稽古期間／2017年5月23日(火)～10月17日(火)
※実施回数／33回
■参加者数／10人

2017年度も鳥取県内全域に「じゆう劇場」の出演者・スタッフを募集し、計10人の劇団員(鳥の劇場団員を除く)が集まった(7人は2016年から継続して参加)。今年度も応募者を県内在住に限定せず近隣県からも参加できるようにしたため、大阪から3人の参加があった。参加者はすべて出演希望である。本年度は小学校の特別支援学級に通う女子児童も参加。劇団員の年齢の幅が広がった。

作品は2015年度に初演した『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの』(原作：シェイクスピア)の再演である。出演者の体験や原作の物語世界から想像して生まれた場面を織り交ぜて、恋のみずみずしさ、無鉄砲さ、崇高さを表現するとともに、モンタギュー家とキャピュレット家の対立を根拠のないものとして描くことで、障がい者と健常者の見えない壁も同様のものではないかと観客に投げかけた。

毎稽古のはじめには、鳥の劇場の俳優による演劇ワークショップを実施。舞台で演じるための基本を学ぶとともに、それぞれの体の特徴を知ったり、出演者同士がより打ち解け合うなどの役割を果たした。

完成した作品は、フランス・ナント市のリュ・ユニックを含む3会場で上演した。

『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの－2017』

■構成・演出／中島諒人　齊藤頼陽
■出演／井谷優太、北村未菜、島田ひかる、武内美津子、仲野真由美、西垣伸子、福角幸子、福角宣弘、三好眞比郎、和田尚也、齊藤頼陽、村上里美
■上演回数／3回
■来場者数／計733人

2017年9月16日(土)
「鳥の演劇祭10」のプログラムの一環として上演
■会場／鳥の劇場
■来場者数／147人

2017年9月29日(金)
■会場／倉吉未来中心小ホール
■来場者数／166人

2017年10月23日(月) 障がい者の文化芸術国際交流事業
「2017ジャパン×ナント プロジェクト」
■会場／リュ・ユニック グランドアトリエ(フランス ナント市)
■来場者数／420人

ドキュメンタリー『じゆう劇場の瞬き』上映

映画監督の山崎樹一郎氏により2016年度に制作した『「じゆう劇場」の瞬き』の上映会企画者を募り、鳥取県内、岡山、高知、フランスで上映した。演劇作品を各地で上演するのは多大な時間と労力、資金を必要とし、年に数か所にとどまってしまう。映像作品という持ち回りやすい媒体を用いることで、県外・国外にも比較的容易にじゆう劇場の活動を紹介することができた。

「演劇の招聘は難しいが映像作品なら是非上映したい」という団体や大学などが多数あり、2017年度だけで10か所18回の上映を行うことができた。鑑賞した観客からは「演劇とは違った距離感でじゆう劇場の活動を認識することができた」「演劇は見たことがないけれど映画を観て是非次回の上演に行ってみたいと思った」などの感想をいただいた。

■日程／2017年7月17日(月)～12月10日(日)
■会場／米子コンベンションセンター、くらよしアートミュージアム無心、倉吉未来中心、鹿野地区公民館、鳥取大学、ギャラリー鳥たちのいえ、兵庫教育大学(兵庫)、きらめきプラザ(岡山)、シアターTACOGURA(高知)、シテ・デ・コングレ(フランスナント市)〔全10か所、18回〕
■来場者数／計300人

■2017年3月
ドキュメンタリー映像作品『じゆう劇場の瞬き』を鳥取県内各所の図書館等へ加配

アメリカの障がいのある人たちの劇団TBTBによる演劇ワークショップ

■日程／2017年9月26日(火)・27日(水)
■会場／倉吉未来中心リハーサル室
■参加者数／計28人

関わったスタッフによる振り返り

2017年のじゆう劇場は9月から10月にかけて、鳥の劇場(鳥取市)、倉吉未来中心小ホール(倉吉市)、リュ・ユニック(フランス・ナント市／フランス国立現代芸術センター)の、日仏三ヶ所で公演を行いました。私は演出助手として鳥の劇場とリュ・ユニックの公演に参加しました。

どちらの公演もお客様からとてもいい反応をいただきましたが、特にナントでは長旅の疲れと初の海外公演という興奮もあってか体調不良者続出などのハプニングもありつつ、終演後の圧倒されるほどの拍手に舞台裏にいた私も胸が熱くなる思い出深いものになりました。

何が、みる人の心に響いたのか。

今回の演目は『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの』。シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」がマンガ的な省略でポンポンと展開していきながら、合間合間でおもむろに演者自身の恋の経験や創作・恋物語が語られます。時に思わず吹き出し、時にその痛切さに絶句し、そして時に甘酢が効き過ぎて心がヨダレをこぼしてしまう彼ら自身の物語と「ロミオとジュリエット」がいつしか交差し絡み合い、別の場所に像を結び始める…。

確かに彼らの多くは何らかの障がいを持っている。それはTVや映画、舞台で見慣れているような自由闊達に動き回り発声する俳優の姿ではありません。

でも自由闊達であることだけが表現ではないことがよくわかるのです。人の身体はそれはそれはたくさんの情報を発していて、私たちは結構それをキャッチしています。あ、あの人今気分が乗ってないな、だの、それ面倒だと思ったな、だの。だから、やり慣れないことーセリフを言う、段取りを演技の中でやる、といったことに挑戦している、そのポジティブな力も感じるし、やはりそれは心が動かされるのです。

舞台では助け合う姿も印象的でした。車椅子の手助け、マイクを持ってあげる、手を引く。

あれ、そういえば手助けって難しいな。それは自分でできるって思われるかもしれないな、失礼にあたるかもしれないな、これされたらちょっとやりづらいんじゃないか、と自意識がぐるぐる堂々巡りです。(すいません、昔からこういうとき頭の中で悶々としてしまいがちです。)

そして手助けしたい、協力したい、という気持ちをはじめあらゆる善意は暴走することがあるよな、と。からまわりとも言いますか。

私は昔、父の誕生日に夏物のジャケットを父の趣味にお構いなく贈りタンスの肥しを増やしてしまったことがあります。たぶんこういうことが昂じると善意が暴走し、果ては正義が戦争を始めるんじゃないでしょうか。これは「障がいうんぬんを超えて他者を理解しようと挑戦することへのメッセージ」であり、それを私も含めて皆受け取って共感したのではないか。

「障がいうんぬんを超えて…」といえば、これまでじゆう劇場に関わってきた俳優に興味深い話を聞きました。「障がいがあれば物理的にできることできないことは当然出てくる。そして俳優としては演劇づくりの上で要求したいこともあるけれど、相手の気持ちも無視はできない」…ってこれは通常俳優同士のやっていることと全く同じ事情ではないか、と。

あることが得意な俳優と苦手な俳優がいる、だからお互いの人間性のすり合わせになってくるのだと。

普段の芝居づくりと違うこと、つまり、障がいを持つ方々を前面に押し出すということ、に少し距離があった私の感覚に変化がありました。

何か耳ざわりの良い言葉だけで語られるのではなく、集まればいろんなことが起きてしまう「人間というもの」を根っこにして舞台をつくっている、そのことを今後も深めていければ…。

現場からは以上です。

大川潤子

le lieu unique
ENTREE

ROMEO
ロミオ

活動報告 6

鳥の劇場以外での上演

■YONAGOピンクリボンフェスタ2017　10周年記念大会『いのちのおっぱい（朗読劇）』
2017年6月18日（日）　会場／米子市福祉保健総合センター ふれあいの里　来場者数／108人
■米子こども劇場例会『どろぼうがっこう』上演　2017年8月6日（日）　会場／米子児童文化センター　来場者数／100人
■海外公演BeSeTo演劇祭中国公演『老貴婦人の訪問』　2017年11月10日（金）
会場／中国杭州XIXI ART CENTER　来場者数／800人
■『すてきな三にんぐみ』　構成・演出／中島諒人
2017年11月26日（日）　広島おやこ劇場　会場／広島市東区民文化センター　来場者数／320人
2017年12月8日（金）・9日（土）　とっとり中部応援プロジェクト　会場／倉吉未来中心　来場者数／計557人
（応募総数／1015人）

関わったスタッフによる振り返り

10月、BeSeTo演劇祭で『老貴夫人の訪問』を上演するため、中国へ渡った。BeSeTo演劇祭は、中国・韓国・日本が演劇での文化交流をはかるため、毎年順番に開催地を巡って行われている国際演劇祭。鳥の劇場がこの演劇祭で中国へ行くのは今回で3回目だ。

9年前、初めて中国で上演した時のことは忘れられない。演目は、中国の作家・魯迅の『剣を鍛える話』だったが、上演中の客席が日本とは全く違っていた。まず、開演しても観客の話し声が止まらない。ほとんど皆が話しているので、結構大きくざわざわしていた。そして皆何か（ひまわりの種やみかん）を食べていて、その皮は客席下に落としていく。劇場の出入りも頻繁で、その度に扉がバタンと鳴る。携帯電話も鳴り響き、そのまま受けて話している…。その上演で一番に語り始める役だった私は、「誰も聞いていない！ これは私の力が足りないからだ！」心の中で「聞いてくれー！」と叫びながら力一杯声を出した。でも状況は変わらない。自分のせいだと落ち込んでいると、笑いや反応があったりする場所が皆同じだったり、最後には拍手・・・混乱した。後に聞くと、中国では普通のことで、別に面白くないからとか観ていないというわけではないらしい。当時の私は、外国で演劇をする難しさを体感し、それでもやり抜く度胸…いや、そのときの気持ちを引きずって日本へ帰った。

2回目は、中国・韓国の俳優と一緒に『セールスマンの死』をつくった。私は、話の筋とは関係なく合間に出てきて喋るおばちゃんの役。短いセリフだったが、全て中国語で話すという演出にとても苦労した。前回の記憶が強烈だったので緊張したが、中国のお客さんに笑ってもらえた。（単に中国語がつたなく、変に聞こえただけかもしれないが）中国が少しだけ近しく感じられた。

そして3回目となる今回。『老貴婦人の訪問』は、中国でも上演されることが多い演目らしく、どう受け止めてもらえるか不安だった。しかし上演が始まると、始終皆食い入るように集中して観ていることを舞台からも感じる。終演には、たくさんの拍手をいただけた。

振り返ると、苦い思い出もひっくるめて、やはり贅沢な経験をさせてもらっている。生の舞台を通して体感する他国の人や文化は、観光をするときとはまた違った一面が感じられる気がする。それは行く度に私自身の中で、少しずつだが実感をともなったものになっていく。これも演じる者と観客とが同じ空間の中で同じ時間を過ごすという舞台の持ち味なのかもしれない。また近いうちに『剣を鍛える話』を中国で上演する機会に恵まれるらしい。今度はどんなことが起こるのか、どんな人たちに会えるのか、今から楽しみだ。また苦い思い出にならないよう、精一杯やろう。

村上里美

活動報告 7

その他の活動

【客演】

■2017年5月7日(日)　とりアート2017メイン事業『磨公部主』　出演／齊藤頼陽
会場／米子コンベンションセンター BIG SHIP 多目的ホール

■2017年7月22日(土)　星空コンサート　音の絵本『モチモチの木』・『ソメコとオニ』　出演／齊藤頼陽・中川玲奈
会場／米子市淀江文化センターさなめホール

■2017年8月19日(土)　『音のレストラン』コンサート　出演／齊藤頼陽・中川玲奈　会場／島根大学　来場者数／70人

【受託事業】

■2017年6月24日(土)　倉吉おやこ劇場第49回例会「鳥の劇場と絵本で遊ぶぞ!(WS)」
会場／倉吉未来中心　来場者数／59人

■2017年12月15(金)・16日(土)・17日(日)　とうきょうの真ん中で"地方の子育て・暮らし"をかんがえる～とっとりの場合～
「とっとりを知ってもらう3日間」　会場／渋谷ヒカリエ
・「とっとりのことを知るトークイベント」　ナビゲーター／中島諒人
・鳥の劇場プロデュース「お試しトリジュク」・「みんなでつくろう!絵本からお芝居をつくろう! そして発表してみよう!」
対象／小学4年生～中学3年生

【大学連携】

■四国学院大学インターンシップ
2017年8月17日～9月24日　会場／鳥の劇場　参加者数／12名

■鳥取大学地域学部集中講義
2017年7月22日～8月5日(計30時間)　会場／鳥取大学　参加者数／8名

■鳥取大学アートマネージメント講義
2017年11月29日,12月19日　会場／鳥取大学　参加者数／14名

【劇場連携】

■静岡県舞台芸術財団　衣装担当派遣　2017年12月・1月(計5週間)

【RADIO BIRD FM鳥取】

■2017年4月　鳥の劇場 presents『トリラジ』始動、5月初放送　毎週土曜日16:30～17:00

【鳥の目鹿の目】

■2018年3月　情報発信サイトOPEN

【鳥の劇場で行われたその他の事業】

■2017年5月9日(火)　ITC倉吉クラブ5月例会　会場／鳥の劇場　参加者数／30人

■2017年6月3日(土)　八頭高校書道部研修　会場／鳥の劇場　参加者数／20人

■2017年6月7日(水)　合作5・7・5　会場／鳥の劇場　参加者数／20人

■2017年7月8日(土)　暮らし日本フォーラム 地域が紡ぐ普遍的価値　主催／日本財団
会場／鳥の劇場　参加者数／124人

■2017年9月9日(土)　平成29年度米子東高等学校土曜活用事業・
ふるさと鳥取学講座「鳥取を創造拠点に! 鳥の劇場の取り組み」について　会場／鳥の劇場
参加者数／20人

■2018年2月20日(火)　「鳥取県文化施設協議会」自主企画事業研修会と施設管理業務研修会
会場／鳥の劇場　参加者数／30人

【見学・視察】

■個人での劇場見学／91人
■クルーズ船「パシフィックヴィーナス」の乗船客観光案内／23人
■鳥取市立川町高齢者の皆さん／21人
■「大山会」ふるさと視察訪問／12人
■「地域づくり」に興味のある方々の集い(全国から参加)／14人
■大阪・熊取町から視察／34人
■鳥取市中心市街地活性化協議会視察／10人
■高知からの視察団体／12人
■知事会関係者視察／21人

など　年間 計238人

関わったスタッフによる振り返り

衣装を担当している安田です。私はここで仕事をして５年になります。今回、静岡県舞台芸術センター、SPAC に12月から正月をはさんで５週間、衣装研修に行ってきました。SPACと鳥の劇場は以前から交流があり、スタッフの研修は今までも相互に行われていました。

私は鳥の劇場では一人で製作しており、できることに限界があるように感じ、今の状況でどのように前に進むかを悩んでいました。ですので、違う現場に触れ、同じ衣装担当の人と話ができる機会を持てることが嬉しく、張り切って研修にのぞみました。

研修前半は13年ぶりの再演で衣装も一新する「オセロー」の製作。衣装班はデザイナーを中心として６名、ここに私も加わって７名で製作が進行しました。工程はデザイン画を元に型紙をおこし、縫製、フィッティング、プリントの型作り、プリント、加工、仕上げと最初から最後まで携わりました。縫製では扱いにくい生地はより丁寧に、うまくいかなければ、縫い目をほどいてもう一度縫い直し。私は何度も縫い直すことになり、その度にアドバイスをもらいながら作業を進めました。

舞台衣装は既製服と違い、着るためのものでなく見せるためのもの。衣装を裏返してみるとそこには実践で培った技術がたくさん詰まっていて、ぬいしろの取り方のような細かいことひとつにしても、とても参考になりました。

研修後半は再演を重ねている「しんしゃく源氏物語」。ここでは衣装の管理や本番中の衣装ケア、作品の舞台である平安時代の貴族の髪型のかつら結いをしました。

できそうもないと思ったことでも、小さなできることを組み合わせて積み上げると、実は実現可能だと気づくことが何度もありました。

新人からベテランまでの衣装班の面々とも昼食や休憩を同時に取るので話す機会も多く、疑問に思っていたけれど誰にも聞けなかった衣装に関する質問をしたり、舞台衣装の考え方を語り合うこともでき、素晴らしい体験でした。少し離れたところに同じように悩み、同じように奮闘する人がいると思うと本当に心強く、たったそれだけのことですが、大切なものを得られたように思います。

一段ずつ階段を進んでいく演劇人生、少しだけスキップして数段進めた気がします。これを糧にまた一段、一段、前に進みたいと思っています。

安田茉耶

お客様の声

【イワンのばか】

- イワンがとてもやさしいと思いました。兄などあくやくがイワンやイワン国の人たちを「バカ」と言ったのがひどいと思いました。あくやくが食りょうやどう物をやいたのが、ひどいと思いましたが、さいご兄がみんなとなかよくしていたのがよかったです。あくまがばけて兄をだましてわるい人にしたのがいけないと思いました。またおもしろいお話をやってください。（10才未満女性）
- すごく感どうしました。やさしい人ばかりでしたね!私の家も農家なので野菜などの食物はいろいろな人が一生けん命作られたものなのですごくイワンたちのきもちがよ～くわかりました♪弟（6さい）も「感どうしたー。」と言っていました。鳥のげき場は"いきいき"とした方が多いんだと思います。毎回来るたびにまた鳥のげき場に来たいと思います。（10代女性）
- "働く"事が重要な国であったが、"働けない"人はどうなるのだろう?別の"働き方"があるのだろうか。（20代女性）
- 豊かさの提示の仕方としてとても好きです。（30代女性）
- お腹がよじれる程、今回も笑いました。家族みんなで来ることができ、幸せな時間でした。イワンの幸せに感じることが、私たちの生活の中で当たり前であったらいいのに、と思わずにいられません。兵士がリンゴをいただいて食する、美味しいと感じるシーンに涙が出そうになりました。私たちは幸せなんだなと思わずにいられません。子どもたち3人と一緒に見て、子どもたちのこころにどう感じられたか、少しでもこころ豊かに、何かしら残るものがあったらいいな、と思います。（30代女性）
- マラーニャの声を聞いた時から涙が止まらなくなりました。一人でも多くの人が観に来てくれるといいなと思います。声をかけていきます。（30代女性）
- 人生初めての演劇鑑賞が今回の鳥の劇場さんの「イワンのばか」でした。とっても楽しくて、おもしろくて笑顔になるステキな演劇でした。しかし、内容はとても考えさせられるお話でした。アフタートークショーにも参加しましたが、先生のお話自体もそうですが、参加者からの質問もあることで、より演劇内容について深みが増しました。今後も参加したいと思います。（30代女性）
- 今の政権にぜひ観てもらいたい内容でした。何が賢くて何がバカなのか本当に考えさせられました。また日本の将来についても考えさせられました。（40代男性）
- 時代の変化、働き方、価値観の大きな変化の潮目に、何を大切にしていかなくてはいけないのか、心に色々な感情が折り重なっていきました。イワンのばかを、倫理的な道徳話でなく、普遍的な角度で捉えた事に新しい感覚を覚えました。（40代女性）
- どのような話か知らなかったが楽しく観れた。なかなかできないと思うが、みなが幸せになりますように。（50代男性）
- 岡山から参りましたが、ここにきて意味のある、大切な事を考える時間を過ごすことができました。（70代女性）

【NIPPON・CHA！CHA！CHA！】

- 久しぶりに2時間の演劇を観ました。目の前での生の演劇にとてもお腹いっぱいになりました。やっぱり生はいいものですね。（20代女性）
- ダンス、音楽、とても楽しかったです。私も一緒に演じてみたいなと感じました。足りない、ものがない時代も楽しく生きていた。それを思い起こす演劇でした。NIPPON･CHA! CHA! CHA!名曲でした!（30代女性）
- 泥臭いけど洗練されている。全体の印象です。（30代）
- 最後の突き落とす展開がよかったです。伝わるものがありました。ありがとうございました。（40代男性）
- 客席と一体となった舞台空間を味わいました。アフタートークを含め、一緒に感じ、考える取り組みの意義を感じます。（50代男性）
- いつ観ても非常におもしろく、ひきつけられる。2時間ブッ続けでも飽きることなく観られた。ありがとうございました。（50代男性）
- 難解でした。今回も。でもそれでいいのですよね。分かりやすくては意味がない。この「分からなさ」は何なのか、考えたくてアフタートークに参加。境界のあいまいさ、ということを考えました。仮想と現実、生と死、善と悪…。絶対的なものなんてありえないし価値観は人それぞれ。それはそれとして、「小さな私」が普遍的なものであり、孤独も、日々のささやかな暮らしのひとつひとつが、誰でもが抱えているものなのだということに勇気付けられました。非日常の空間、時間を楽しませていただきました。今後も期待しています。ありがとうございました。（60代女性）
- 劇の力強さを感じたように思います。こちらでの10年の重みということでしょうか。満席以上になるのも分かります。（60代男性）
- 新しい団員、新しい前へ進んで行く鳥の劇場の姿を見ることが出来ました。こんなに多数の入場者を見ました。年配と思われる人達が劇に共鳴しておられる姿、児童が熱心にみている姿を見て、何かとてもうれしくなりました。私の今日、明日をかいま見ています。（70代女性）

【三文オペラ】

- 生歌、生演奏、はくりょくがあり見ていてあっとうされる。見ていて飽きなくておもしろいです。1人何役もしているのに全然違う人に見えてすごいと思います。舞台全体を使っているので演技も大きくてとてもおもしろいです。金庫からの登場最高でした!!（10代女性）
- 「見たて」というものがおもしろいと同時に難しいものだと感じました。アフタートークでもありましたが、想像の力を使うこの演出は舞台ならではの良さがあったと思います。目に見えている銀行は銀行ではない。しかし、想像力が求められるこの演出は、理解を難しくさせるものでもありました。はじめの方は設定がよく分からずなかなか集中できませんでした。後半は理解ができて、はじめの方をまた見直したいと思いました。（20代男性）
- 物事の本質は何だろう…といつも考えさせられます。そして、私たちに何ができるのかと。また考えるヒントを下さい。パワフルな時間を有難うございました!（20代女性）
- 独特の雰囲気に前半は置いていかれそうでしたが、歌に重要なメッセージが詰め込まれていたので後半は聴き入ってしまいました。現実は物語やおとぎばなしのように甘くはありませんよね～。（20代女性）
- 観終わって、心にくさびを打ち込まれたような重さを感じました。豊かさってなんだろう…。私はまだ本質はわかりません。（30代女性）
- 歌部分の言葉がわかりづらくて、内容を追えなくなってしまいました。（40代女性）
- オペラの上演で、鳥の劇場のまた違った一面を見れて面白かったです。（50代女性）
- 正直演劇のことはよくわかりませんが、迫力のある歌声から伝わってくるメッセージは強烈でした。普段見て見ぬ振りをしている自分自身にハッとしました。冷たい世の中との最後の声でしたが、この劇場は温もりのあるところですね!（50代女性）
- 色々と想像させられる楽しい芝居でした。お客さんに想像力を求めすぎると嫌がられる近年ですが、想像することの楽しさを教えてもらえる内容でした。最後に金庫の中を見せるしかけも好きでした。これからも鳥取県の演劇界を牽引していって下さい。（60代男性）
- いつも思うのですが、鳥取で観ることができる劇場があることに感謝しています。（60代女性）
- きれいな声のオペラも良いかもしれませんが、声に感情が入っていて、これはこれですごく良かった。今も昔も変わらないことへの虚しさと腹立たしさを感じました。（70代女性）
- 世界の色々の場所、時代で色々の形で演ってきたものを、今この時にこの場所で鳥劇らしい作品に仕上がっているのを観られて良かった。（女性）

【小鳥の学校】

- 劇の一体感が凄い！ チームが一つになって出来上がるパワーや勢いがあった。（10代男性）
- みんなが輝いて見えました。みんなの劇をみて私も来年やってみたいと思いました。（10代女性）
- 自分たちで作り演じ終わった時のみんなの顔が素晴らしかったです。来年度以降も続くことを期待し、楽しみにしています。（40代男性）
- 公演は表に出る一部で、そこに至るまでのプロセスで色々学んだり考えたりしていたのだろうというのが伝わってきました。（40代女性）
- 一人一人の個性がきちんとあって、それがまとまって一つになっている、素晴らしいです。大人もこうやって個人個人を認め、折り合いをつけて生きていけたらどんなに素敵だろうと思いました。（40代女性）
- 初めて観に来ましたが、笑いあり、ドキドキ感もありとても感動しました。小さな子供でも観やすい子供イス、毛布も、心遣いがとても素敵でした。（40代女性）
- 子供達がいきいきしていて、見ていて楽しかった。（40代女性）
- 子供達だけで台本を作ったり演じて衣装や照明までも考えてするなんて驚きでした。教わった事をするんじゃなくて、19人がそれぞれに輝いていて、みんなで一緒に力をあわせてやってきたプロセスがみえました。（50代女性）
- おいはぎのおばあさんのド迫力、また観たい！ 閻魔さまの怖そうなのに面白くて可愛い所、最高でした。そうべえの奥さんがなんとも良い味でもっと二人のやり取りを見ていたかったです。（50代女性）

【つくる高校生:春のめざめ】

- 「性」を題材にしていて、とても難しい内容でしたが、高校生がそれぞれの役の心情を読み取りながら演じられていてとても良かったです。社会の大人への疑問を子どもたちが抱きながら葛藤している様子がよくわかった。自分にも近いものがありました。（10代女性）
- 難しいお話だと思いました。終わり方もはっきりとしてなくて、なんだかスッキリしないお話だと思いました。でもスッキリしないからこそ、自分自身で性や自殺に関して深く考えるきっかけになりました。（10代女性）
- リアルできんぱく感がでていたので、すごくひきこまれました。舞台セットや小道具も、とても工夫されているなと感じました。「性」について色々と考えさせられました。大人ってこうだよなーとか、子どもの考え方とか、いろいろと共感しました。（10代女性）
- あまりにも難しい脚本と正面から向き合っている高校生の皆さんの姿に、心から感動し、若い命の尊さを実感することができました。他者を演じることで、必ず実生活においても他者に優しくなることができると思います。それと同じくらい自分をも大切にして生きていってもらいたいです。（30代女性）
- モーリッツの演技、声、よかった。メルヒオール、男前だった。よくセリフを間違えずにスマートな演技だった。イルゼ、小悪魔な感じ、よく出ていた。ワラの効果、なかなかよかった。（40代男性）
- 100年前の戯曲に高校生が取り組む様子、興味深く観ました。（彼等なりに噛み砕いて、解釈して、頑張っている様に感心しました。）モーリッツ、熱演でした。イルゼ、ほとんど"地"でやってましたね。でもリアルでした。一番!（50代男性）
- いろんな学校のやる気ある部員でひとつの劇をつくり上げていくことの大変さが伝わってきたが、上演後はみんなの達成感がよく感じられました。各高校のレベルアップにつながっていくと思いました。（60代男性）

【つくる高校生:わが街】

- お話はむずかしかったけれど、ひょうげんがくふうされていたのでかなしい場面やうれしい場面がよくわかりました。うしろのけしきがまるでアメリカにいるようなきぶんにさせてくれました。（小学校3年生）
- 観客に投げかけるような演出が、客席と舞台が近い事を生かせていて良かったです。（10代女性）
- 窓の外の景色も舞台の一部として使ったり、アフタートークで皆様が言っていたように、シンプルなセット、衣装で観客に想像しやすいようにしているというのは素敵な考えだと思った。いろんな高校の高校生たちがこの活動で得たものをそれぞれの高校に持ち帰ってたくさんの人に共有してもらえたら嬉しいと思う。（10代女性）
- テンポ良く進行しながら、その場で役柄・場面・時間が切り替わり、舞台と観客席、背景が別々に存在するのではなく、ひとつながりになって拡がっていく感覚が生まれて面白かったです。一つのことに本気で取り組むそのありようをこれからも見守りたいし、応援したいと感じました。高校生達が色々考え、悩みながら頑張っているっていうのを、実際に感じる機会がほぼないので、そういう意味でも観られて良かったです。ずっと胸に残って、確かめたくなるような公演をありがとう!（40代女性）
- 小鳥の学校と、高校生の劇の間が、もう少し短いと、続けてみる事が出来やすいかなと感じました。（40代女性）
- 地域（地元）でこんなにもレベルの高い作品が見られる事にいつも感動し、感謝しています。今回の長編作品も高校生が演じているとは思えないものでした。これからも芸術文化を鳥取で育む「鳥の劇場」の活動を応援していきたいと思います。（50代男性）
- 舞台全体と、一人一人が観客を引き込んでいっていたと思うし、私は完全に引き込まれていた。小学生による演劇、高校生による演劇と分けるのではなく、人の心を打つ演劇かそうでないかで分かれるんだと気付かされた。皆さんそれぞれ高校の演劇部にいらっしゃるんですね。各高校でもこの成果が伝わって広がっていくと思うと嬉しいことですね。（50代女性）

【若手演劇人発表】

- 現代人にありがちな感情だった。色々な劇を観たい願望がでてきた。今回の劇を観て、なんだかよく分からないゆらゆらした気持ち、感覚に気づいている人は自分に突き刺さるものがあって、気づけてなかった人は考えだす機会に出会ったのではと思った。（10代）
- 中学生さんが自分の中学時代の考え方と似ていてすごく共感した。「自分は何なのか…」色々、中学時代のことを思い出していた。最初から最後まで引き込まれた。（10代男性）
- 難しい作品でした。しかし難解という意味ではなく現代社会の「難しい」問題をテーマにしているのだと思いました。アフタートークの際に演劇の利点について松村さんが、人間の関係性を表すことをおっしゃっていて、なるほど、大賛成だと思いました。客として劇の一員になることで、不確かなゆらゆらとしたモノゴトがこんなにも目や耳を通じて伝達してくる、こうゆうことなのかなと思いました。（10代男性）
- 今の時代にとてもつながった演劇をみて、人とのコミュニケーションや、社会の中で生きるという、とても考えさせられる時間を頂きました。ただ月日が流れるだけでなく、やはり生きる価値や目標などを持つ、または持てることはとても幸せなことなのかと思いました。今の時代を客観的に見れたことはとてもいい時間になった。ぜひ多くの場所や人に見てもらえたらいいなと思ったので、ぜひ頑張って頂きたいです。（30代女性）

【じゆう劇場「ロミオとジュリエット」から生まれたもの-2017】

- 出演者が一体となり、とても感動を覚えた。また違う作品が見たい。（10代男性）
- ストーリー自体は難しく思い、わからないところもあるのですが、"障がい者"という壁をなくしていきたいという思いは伝わってきました。また、シーンごとのふんいきや表情のうつりかわりがとてもおもしろかったです。（10代女性）
- ロミオとジュリエットから生まれたものというタイトルにふさわしい内容で、難しいところもありましたが、観終わった後のスッキリ感は言葉で言い表せないくらいです。感動しました。壁をとっぱらった生き方、私もしてみたいと思います。文章が下手くそですが、本当に観に来てよかったです。ありがとうございました。（20代女性）
- 私の持っている言葉のボキャブラリーではこの感想はとても言いつくせませんが、本当にとても、すごくよかったです。人として生きていく上での大切なこと、とてもたくさん教わりますね。脚本演出もとてもすごいなーと思いました。また観に来ます。（30代女性）
- いろいろ考え直す機会となりました。自分の中の偏見が見え隠れする…障がいに対する向き合い方など。同じように関わることが一番なんだと思いました。（40代女性）
- じゆう劇場2015年のロミオとジュリエットから生まれたものも観ました。その時の衝撃が心に残り、昨年、今年と続けて観ています。洗練されてきたと同時に、もっとハチャメチャでもいいのでは?と思う気持ちもあります。ハチャメチャというか…うまく言えませんが。これからも期待しています。（40代女性）
- 時に役になり、時に自身の言葉で語り、飽きさせずまたストレートで胸にずしんときました。ロミオとジュリエットという題材もいろんな意味に捉えられ、より深いものになっているように感じました。みなさんブラボーです。私も障がいのある方と舞台に取り組んでいるので、あーがんばろうと素直に思いました。（50代女性）
- 感動しました。最後、テープを剥がすところが印象的でした。みなさん素晴らしかったです。（50代女性）
- それぞれ1人1人のロミオとジュリエット、それぞれの個性が生かされていたのでかがやいた舞台でした。みんなが自由に思っていることを言えるところがいつもあればいいな。やはり演出がすばらしい。（50代女性）
- 前回の「銀河鉄道の夜」にとても感動しました。今回はまた違った舞台で楽しめ、また後半に至って心動かされ、涙が出ました。フランス公演すばらしいと思います。是非楽しんで、すてきな舞台を世界の皆さんに伝えてきてください。鳥取から応援しています。福角さんご夫妻、とても素敵なカップルですね。（60代女性）
- すてきだなぁ、できるかなぁ、やりたいなぁ。

【すてきな三にんぐみ】

- はく力があってとっても面白かったのでまた見たいです。手づくりだったので面白かったです。赤い人形もとってもかわいいです。（10才未満女性）
- 面白かったです。特に、間や最後にステージに上がれたりする所と絵本にはかいていない部分もあって、この物語を初めて見る気持ちで見ることが出来ました。他にも、音を出す楽器が初めて見る物が多くて、音も面白かったです。（10代女性）
- とても心が温かくなりました。子どもを芸術に触れさせてやることができて本当に良かったです。鳥の劇場にもぜひ行かせてもらいたいと思いました。（30代女性）
- すてきな三にんぐみが作ったお城が村になり大きな町になっていくのを見て、地震で壊れた町や絆を取り戻していこうという勇気が湧いた。（40代男性）
- 手づくり感がよかったです。子ども達をステージに上げるアイデアはおもしろいなと思いました。感心しました。（40代男性）
- 地元でいいお芝居が見られる。子どもと一緒に子どもも楽しめるお芝居が見られる。最高です。今後も応援していきます。（40代女性）
- 親子で満喫させてもらいました。地震から1年が経ちました。おそろしい思いをしたけれど、希望を持ち、日常を取り戻すことができました。鳥の劇場の皆さんからも大きな勇気や夢を頂いています。子どもがそう言うので本当だと思います。（40代女性）
- 親子で行ける劇がもっと増えると嬉しいです。行ける所にはみに行きたいです。（40代女性）
- 一緒に参加できている感じがとても嬉しく、子どもも見入っていました。（40代女性）

日本海新聞
2017年（平成29年）5月14日
日曜日

朗らかな中に近代化を振り返り未来を構想する試み

鳥の劇場「イワンのばか」

舞台の一場面

トルストイの『イワンのばか』は、日本の民話と似た風情もありますが、違いもあります。こんな話です。

富裕な農家の3人兄弟の末っ子イワン。兄2人は立身出世を願い、利己的に振る舞うが、イワンはその要求をなんでも受け入れ、結局、利他的に円満な兄弟関係。そこに悪魔が目をつけ、手下の小悪魔3人を使って末の破壊を企てます。しかしイワンの朴訥さや体力が謎の力となって、小悪魔は撃退され、3人兄弟はそれぞれ国を持つ王となります。怒った悪魔の親分は、自ら兄弟つぶしに乗り出します。

日本民話には地域の因習や習慣のような古いものを常識とし、ズレる者をはかとしています。「ガルストイの世界では、「金」とか「戦争」という新しい価値観に適応しない者をはかとしています。彼は民話のばか話の構造に、経済と労働という近代的モチーフを接続して、それらを批判することを目指しました。

物語が書かれたのは、1885年。明治の時代的テーマは立身出世と富国強兵、イワンの3人の兄弟の作ったのは、金の国と長隊の国。ロシアと日本は帝国主義先行国を追って、進み方は違っても同じ道を歩もうとしていました。

金持ちになること、軍事的強者となることは正しいこと。これは常識なのか。受け入れざるを得ないことと思っていて、みんな生きてきました。そしてそれらはだんだん常識になりました。来年は明治維新の始まりから150年。イワンのばかは、朗らかでコミカルな笑える話を通して、同時に日本の近代化を振り返り、未来を構想する壮大な試みでもあります。

（中島誠人・鳥の劇場芸術監督）

◇鳥の劇場「イワンのばか」上演（新日本海新聞社など後援）は19・22日、25・28日、鳥取市鹿野町鹿野の鳥の劇場で。大人2千円、18歳以下500円、中学生以下無料。問い合わせは電話0857（84）3268、同劇場。

日本海新聞
2017年（平成29年）7月8日
土曜日

会場も舞台に一緒に楽しむ

青谷高で演劇

学校祭で演劇「どろぼうがっこう」を演じる鳥の劇場の役者たち

鳥取市青谷町の青谷高（小川勝校長、204人）で5日、鳥の劇場（同市鹿野町）の公演があり、全校生が本格的な演劇鑑賞を楽しんだ。

4・6日に開かれた学校祭の初めての企画。演目は、かぐやと一緒に「どろぼうがっこう」。ラストは中島さんも加わり、生徒たちと一緒に「アオコー、アオコー」と応援歌を歌った。

学校祭の中島崇人さんが機械、演出した「どろぼうがっこう」。配役は、生徒会の北山敦人副会長（17）は「本格的な劇場で演劇を見るのは初めてだった。役者さんが楽しそうで、生徒たちも一緒に楽しめた」と話した。（前場英雄）

日本海新聞
2017年（平成29年）6月19日
月曜日

乳がん早期発見 演劇通して訴え

米子でピンクリボンフェスタ

乳がんに関する知識と理解を深める「YONAGOピンクリボンフェスタ」の10周年記念大会（いのちのおっぽい）（実行委員会主催）が18日、米子市錦町1丁目のふれあいの里で開かれた。鳥の劇場（鳥取市鹿野町）による演劇や専門医の講演を通して、乳がんの早期発見の重要性を呼び掛けた。

演劇「よい！旅行」は、乳がんを告知された34歳の女性などを主人公にした三つのストーリーを、乳がん患者の実体験をもとに構成。トークや朗読などを交え、観客にリアルな乳がん患者の心情や課題を伝えた。

また、松江赤十字病院の村田陽子医師が講演し、乳がんの最新の検診方法や治療、自己検診の仕方などをアドバイス。「がんが見つかることより、気付かずに時間が過ぎていく方が怖い」と早期発見の重要性を指摘した。

実行委のメンバーで乳がん患者の西をもとに演じられた演劇＝18日、米子市錦町1丁目のふれあいの里

日本海新聞
2017年（平成29年）8月31日
木曜日

米、仏の劇団など10団体出演

8日から「鳥の演劇祭」

鹿野

活き活き用「まちのみせ」も登場

鳥の劇場の新作「NIPPON・CHA！CHA！CHA！」のイメージ写真（鳥の劇場提供）

「鳥の演劇祭10」（鳥だ、イメージ）をテーマに、米国、フランス、ロシア、ポーランド、ベルギーなど国内外の10団体が演劇やダンスを披露、全上演でデジタル字幕を使って英語訳を付ける。今年は「このさい考えよう、ことば、から」字幕を用意する。

地域の演劇文化の振興を目的に2008年に鳥取県鹿野町でスタートし、09年度以降は海外の劇団を招いている。今回は、古い映画を舞台に活動する若手劇団と巧みな社会派ダンスを演じる劇団が米国から、ダンスと演劇を取り入れたサーカス団がフランスからやって来る。

同町に拠点を置く「鳥の劇場（中島誠人芸術監督）」は、新作劇「NIPPON・CHA！CHA！CHA！」を上演。真髄の商業化を問題提起する。

地域住民が参加する演劇やダンスは、イベント活用した「温泉だけのまちのみせ」が、延べ約50店舗を出場する。

同祭プログラムディレクターを務める中島さんは「質の高い演劇作品を観客に発信する」と強調。

公演は、「質の高い演劇」を合言葉に、「共に生きる」とはどういうことか、全く未知の感覚で投げ掛ける。

◆鹿野タイムスリップツアー「マサオの光る空」

鳥の劇場が、地元鹿野町のお年寄りに取材して作ったセミドキュメンタリー的演劇作品。町内各所を回遊しながら参加者に過去の時間や生活を体験してもらう。

を予定。鳥取県東中部の高校生が新進気鋭の劇作家・松井周さんと取り組む戯曲「森のめざめ」を披露するほか、鹿野町のお年寄りに故郷の思い出を語る演劇「鹿野タイムスリップツアー」など多彩なプログラムをそろう。

期間中、町内には約20カ所の空き家などを活用した「温泉だけのまちのみせ」が、延べ約50店舗を出場する。

同祭プログラムディレクターを務める中島さんは「質の高い演劇作品を観客に発信する」と強調。

公演は、「質の高い演劇」を合言葉に、「共に生きる」とはどういうことか、全く未知の感覚で投げ掛ける。

◆鹿野タイムスリップツアー「マサオの光る空」

鳥の劇場が、地元鹿野町のお年寄りに取材して作ったセミドキュメンタリー的演劇作品。町内各所を回遊しながら参加者に過去の時間や生活を体験してもらう。

（浜田亜紀）

日本海新聞　2017年（平成29年）9月2日　土曜日

国内有数の演劇祭「鳥の演劇祭10」（鳥の劇場運営委員会など主催、新日本海新聞社など後援）が8日、鳥取市鹿野町で開幕する。鳥の劇場など4会場で24日までの土日・祝日を中心に、国内外の魅力的な演目が上演されるほか、多彩なイベントが繰り広げられる。主催者は「演劇祭が始まって10年、演劇が地域にどう影響したのか、その蓄積を見てほしい」と多くの来場を呼び掛けている。

鳥の演劇祭10

8日開幕　鹿野

演劇×地域10年間の蓄積

多くの来場者でにぎわった昨年の鳥の演劇祭

喜び楽しさ分かち合おう

演劇化の発展と地域活性化を目的に、劇団「鳥の劇場」を主体に行政や学校関係者などが加わり、2008年から毎年一の時期に開催、期間中、関連行事も含めて約1万5千人が訪れる一大イベントに発展している。

10回目を迎えた今回は、地域住民らが参加するコミュニティー作品にも力を入れる。県内の高校生がプロの演出家の指導で作り上げた思春期がテーマの作品や、障害のある人へ「たとい人が共に舞台に立つ」ことをめざす。

海外からはアメリカとフランスから3団体が参加。国内の6劇団も含め多彩な作品が上演される。

「このほかに、参加者が合作で俳句や川柳を作る「合作5・7・GO！」や国語教育学者、坂本純逸さんの教育助言についての講演、鹿野の町歩きもある。

演劇祭期間中は、空き家や空き店舗を使った「温泉だけのまちのみせ」がオープン。カフェや雑貨など多彩な50店舗が開店する。

鳥の劇場の中島崇人芸術監督は「10年という節目に、演劇祭がどのように影響に根付いたか検証し、皆さんと喜びや楽しさを分かち合いたい」と話している。

作品紹介

『NIPPON・CHA！CHA！CHA！』
出演＝鳥の劇場
上演＝8、10日
会場＝鳥の劇場「劇場」

鳥の演劇祭オープニングを飾る鳥の劇場による新作公演。コミカルな世界の中で、現代への痛烈な批判を投げかける鳥の劇場ワールド。5人の客演俳優とともに、五輪をにぎやかに描く。

『コーペラツィア～道～』
出演＝Le collectif G.Bistaki（フランス）
上演＝23、24日
会場＝鳥の劇場「グラウンド」

瓦やかばんを使ったちょっと不思議でおもしろい、オペラたちにまるでサーカス。たくさんのヨーロッパ式の瓦が、いろんなイメージをつくる。ダ方の屋外での上演から、劇内への旅を楽しめる。

芝居作りに挑戦！　18日に「子どものいちにち」

鳥の演劇祭の名物として定着した子ども向けプログラム「子どものいちにち」が、18日にある。鳥の劇場の人気演目『どろうぼうがっこう』の野外公演が行われるほか、子どもたちが芝居作りに挑戦し、発表する。

『どろぼうがっこう』は大人も子どもも大爆笑の超人気演目で、鳥の劇場「グラウンド」で上演される。演劇を鑑賞した子どもたちがグループに分かれて、鳥の劇場の団員や振付家の伊藤キムさんに相談しながら、それぞれにテーマを設け芝居作りに挑戦する。

その後、出来上がった芝居を鳥の劇場「スタジオ」で発表。

子どもたちが主役の「子どものいちにち」で、楽しそうに舞台発表する子どもたち（昨年）

参加者みんなで芝居を鑑賞する。

鳥の劇場は「創造力や表現力などを楽しみながら養う場にしたい。多くの子どもに参加してほしい」としている。

【その他の主な演目】

◆『セシリーの冒険』（米国）
出演は、アメリカの小さな鳥の古い納屋を拠点に活動する若いグループ。シンプルなセットの中で、観客を巻き込みながら楽しく活気のある劇世界を作り出す。

◆『即興戯曲　飛ぶ教室は　今』
ドイツで活躍のピアニスト高瀬アキさんと関西で活躍の振付家、岡登志子さんのコラボ。音楽の生演奏とダンスの競演。

◆『言いたいだけ』鳥取バージョン　コンテンポラリーダンサーで振付家、伊藤キムさんは言葉と体の関係についていろいろな挑戦を試みている。本作は演劇的な実験を秘めており、鳥取上演だけの試みも入る。

◆『アザー・プレイズ：演劇とダンスの短編劇場』（米国）
「障がいを越えていく劇団」の頭文字を並べたのが集団名。障害のある人が周囲とどのように衝突し、関係をつくるか、そのアメリカ的あり方をコミカルにドライに、時にシニカルに浮かび上がらせる。

◆『サング・シカノ（鹿野の血）』
活動開始から10年目を迎えようとしっとダンス。今年は新メンバーを迎え、ニューヨークから京都に拠点を移して活躍する振付家、余越保子さんと新作を作る。

◆『春のめざめ』
鳥取県内の高校生が、劇作家・演出家の松井周さんと一緒に正面から作品作りに取り組む。取り上げるのは、思春期の青年たちの挫折と成長を描いたドイツの戯曲。

◆『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの―2017』
出演は「じゆう劇場」。シェークスピアの「ロミオとジュリエット」を原案として構成した本作を、新バージョンとして再構成。恋愛と対立を主題に、「共に生きる」とはどういうことか、全く未知の感覚で投げ掛ける。

◆鹿野タイムスリップツアー『マサオの光る空』
鳥の劇場が、地元鹿野町のお年寄りに取材して作ったセミドキュメンタリー的演劇作品。町内各所を回遊しながら参加者に過去の時間や生活を体験してもらう。

「鳥の演劇祭10」カレンダー

9 8 金	『NIPPON・CHA！CHA！CHA！』	(19:30～、鳥の劇場、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『サング・シカノ（鹿野の血）』	(12:00～、鹿場劇場、大人1,500円・18歳以下無料)
	『鹿野ぶらぶら町歩き』	(13:00～、集合・鹿場劇場、無料)
9 土	『セシリーの冒険』	(14:00～、鹿野往来交流館「童里夢」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『即興戯曲　飛ぶ教室は　今』	(16:30～、鳥の劇場「スタジオ」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『オープニング・パーティー』	(18:30～、鳥の劇場「中庭」、1,000円)
	『サング・シカノ（鹿野の血）』	(12:00～、鹿場劇場、大人1,500円・18歳以下無料)
	『鹿野ぶらぶら町歩き』	(13:00～、集合・鹿場劇場、無料)
10 日	『即興戯曲　飛ぶ教室は　今』	(14:00～、鳥の劇場「スタジオ」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『セシリーの冒険』	(16:30～、鹿野往来交流館「童里夢」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『NIPPON・CHA！CHA！CHA！』	(18:30～、鳥の劇場、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『「ロミオとジュリエット」から生まれたもの―2017』	(11:00～、鳥の劇場「劇場」、無料)
	『「言いたいだけ」鳥取バージョン』	(14:00～、鹿野往来交流館「童里夢」、大人1,500円・中高生500円・小学生無料)
16 土	『鹿野ぶらぶら町歩き』	(14:00～、集合・鹿野往来交流館「童里夢」、無料)
	『春のめざめ』	(15:00～、鹿場劇場、大人1,500円、18歳以下無料)
	『みんなでGO！合作5・7・GO！』	(16:00～、17:00～、しかのの心、500円)
17 日	『みんなでGO！合作5・7・GO！』	(11:00～、12:00～、鳥の劇場「スタジオ」、500円)
	『「言いたいだけ」鳥取バージョン』	(13:00～、鹿野往来交流館「童里夢」、大人1,500円・中高生500円・小学生無料)
	『鹿野ぶらぶら町歩き』	(14:00～、集合・鹿野往来交流館「童里夢」、無料)
	『春のめざめ』	(15:00～、鹿場劇場、大人1,500円、18歳以下無料)
	『ウェルカム・パーティー』	(17:00～、鳥の劇場「中庭」、1,000円)
	『ナイトイベント』	(屋台村・星空観望会・野外上映会) (19:00～、鳥の劇場「グラウンド」)
	『みんなで観よう！鳥の劇場「どろぼうがっこう」』	(11:00～、鳥の劇場「グラウンド」、無料)
18 月	『鹿野ぶらぶら町歩き』	(12:00～、集合・鳥の劇場、無料)
	『このさい考えよう「教育」のこと』	(12:30～、鳥の劇場「スタジオ」、無料)
	『みんなでつくろう！鉢かからお芝居をつくろう！そして発表してみよう！』	(つくる時間＝12:30～、鳥の劇場「劇場」、鹿野往来交流館「童里夢」、発表する時間＝15:00～、鳥の劇場「スタジオ」、いずれも無料)
23 土	『ママサの光る空』	(12:00～、鹿野町内、無料)
	『アザー・プレイズ：演劇とダンスの短編劇場』	(14:00～、鳥の劇場「スタジオ」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『コーペラツィア～道～』	(16:30～、鹿野町内、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『ナイトイベント』	(屋台村・星空観望会・野外上映会) (19:00～、鳥の劇場「グラウンド」)
	『マサオの光る空』	(12:00～、鹿野町内、無料)
24 日	『アザー・プレイズ：演劇とダンスの短編劇場』	(14:00～、鳥の劇場「スタジオ」、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『コーペラツィア～道～』	(16:30～、鹿野町内、大人2,500円・中高生500円・小学生無料)
	『クロージング・パーティー』	(18:30～、鳥の劇場「中庭」、1,000円)

開催期間　2017年9月8日（金）～9月24日（日）

"BIRD" THEATRE FESTIVAL TOTTORI 10

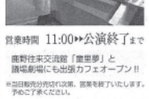
鳥の演劇祭10

会場
・鳥の劇場
・しかの心
・鹿野往来交流館「童里夢」
・鹿場劇場

鳥のカフェ

今時、美術館やアートイベントとおしゃれなカフェがセットなように、演劇祭とカフェは絶対に切り離せません。

今年も鳥取のカフェ文化の発信源cafe-eeeにご協力いただき、地元の食材を活かしたおいしいいろいろをご用意します。



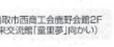
（販売メニュー）
鳥のカフェ日替わりセット……¥850
トマトカレー（デリ付き）……¥850
TRESEE&FEAD'sサンドイッチ……¥500
各種スイーツ……¥200～他

営業時間　11:00▸▸公演終了まで
鹿野往来交流館「童里夢」と鹿場劇場にも出張カフェオープン!!
※当日販売分売切れ次第、営業を終了いたします。予めご了承ください。

鳥の演劇祭セレクトショップ

毎年大好評の期間限定スペシャルショップが、今年は劇場を飛び出して鹿野の町中でオープンします。

今までよりも広い場所に、俳優・斉藤頼陽がおすすめする鳥取の工芸品や食品、アートワークなどが並びます。



店の場所が変わります　場所：鳥取市西商工会鹿野会館2F（鹿野往来交流館「童里夢」向かい）

会場までのアクセス・会場案内

■JRを使って
最寄り駅はJR浜村駅です。
※公演日は浜村駅と各会場の間を、車で送迎いたします（無料、要予約）。

■車を使って
公演日は会場近くに案内看板を設置します。
※駐車場について
鳥の劇場・鹿場劇場は会場近くに駐車場があります。
鹿野往来交流館「童里夢」は鳥の劇場の駐車場をご利用ください。

■タクシーのご利用もオススメです！
定額運賃 5,400円
鳥取駅→鳥の劇場　約30分!!
鳥取駅北口のタクシー乗り場から直接ご利用いただけます。

送迎サービス　無料・要予約
JR浜村駅～各会場間。時間等は、お問合せください。

託児ルーム　無料・要予約
子どもルームにてお子様をお預かりします。
※託児と手配の都合上、必ずご予約ください。

バリアフリー
障がいのある方にも随時対応。一部の上演では、手元用字幕もご用意いたします。

English Subtitles available
海外のお客様向けに英語字幕もご用意いたします。

劇場近くに温泉があります
■鹿野町内の日帰り温泉施設
●山業邦　11:00～20:00　(0857)84-2211
●温泉館ホットピア鹿野　10:00～22:00　(0857)84-2698

www.birdtheatre.org/engekisai/

●チケット予約・購入方法●
予約窓口にて前日までにご予約ください。予約順に入場整理番号をお取りします。（会場内へは入場整理番号の順にご案内します。）
料金は公演当日、各会場受付でお支払いください。
※当日券は開演の1時間前から販売します。各会演会場の受付にてお求めください。
※未就学のお子さまのご入場はお断りすることもございます。

「鳥の演劇祭」予約窓口
TEL：(0857)-84-3268※鳥の劇場
MAIL：ticket@birdtheater.org
■日時指定　■全て自由席

「鳥の演劇祭」問合せ窓口（鳥の劇場内）
TEL：(0857)84-3612
〒689-0405　鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1

日本海新聞
2017年（平成29年）9月14日
木曜日

演目から
鳥の演劇祭10 ㊥

◇問い合わせ
電話0857（84）3268
鳥の劇場

イマドキの高校生と芝居をつくること

『春のめざめ』

「イマドキの高校生」という言い方には抵抗があります。自分が理解できない存在をカッコに閉じ込めて遠ざけるような印象があるからです。けれど、私が今回初めて高校生たちと一緒に芝居を作ることになって、頭にまず浮かんだのはこの言葉でした。

こちらの意見を聞いているのかいないのか分からないし、のべつまくなしに喋り続けるし、じゃれ合うし、真面目にやるかと思いきや、集中力は持続しないし、稽古よりも休憩の方が生き生きとしているし、稽古をドタキャン（稽古当日に休むと連絡すること）しるような気分。

でも1週間ほど稽古を続けていると、彼らは不真面目ではないということも分かってきます。稽古でうまくいかない箇所には本気で悔しがるし、無駄話のように聞こえる中にも今回の芝居への違和感や共感を織り交ぜていることも分かりました。

あるシーンについて、はっきりとした意見として言うには、照れがあったり、自信がなかったりすることを「いい（登場人物の言ってること、気持ち悪くねぇ？」などと笑い合っているのです。そして、数日後には「このシーン好きなんですよ！」とか快活に言い出した。

2週間もたつと、いつの間にかこちらも彼らと真剣に向き合うようになってきました。こいつら何かあるぞ？という期待です。幸い、台本は彼らとほぼ同世代にあたる、100年前の若者の話、『春のめざめ』です。

大人たちに抑圧された子どもたちが、理不尽な形で自分の中の性や死の衝動に気付かされていく話です。その衝動はまさに「他者」です。簡単に飼いならすことはできないし、喜びにも悲しみにもつながっています。

登場人物が「他者」に遭遇してもがくように、彼らもまがまがしいこの作品の中をまよい、ついには泳ぎ方を発見してもらえたらと思います。

演劇はいつだって自分の中の「他者」を発見する喜びなのです。作るにしても見るにしても、そこは変わらない部分でしょう。

どうぞお楽しみに。

（松井周・劇作家、演出家）

（木曜日に掲載）

『春のめざめ』の稽古風景

日本海新聞
2017年（平成29年）9月19日
火曜日

演出プラン自分たちで

子どもら芝居つくり発表

鹿野町で「鳥の演劇祭10」

自分たちで演出のアイデアを出し合って練習する子どもたち＝18日、鳥取市鹿野町鹿野の鳥の劇場

鳥取市鹿野町鹿野の「鳥の劇場など4会場で開催中の「鳥の演劇祭10」（同劇場運営委員会など主催）は18日、「子どものいたにち。」と銘打って演劇「どろぼうがっこう」を上演したほか、子どもたちによる芝居づくりと発表会が開かれた。

児童文学者のかこさとしさんの絵本を基にした「どろぼうがっこう」は同劇場の人気演目の一つ。俳優たちのエネルギーあふれる愉快な舞台を大人も子どもも夢中になって楽しんだ。

続いて、子どもたちが見せる側になって芝居づくりを体験。25人の小中学生が鳥の劇場のスタッフや振付師の伊藤キムさんの指導を受け、「かちかち山」「かさ地蔵」など絵本の一場面を舞台で表現する。立っていた方が面白い」などと自分たちでアイデアを出し合いながら演出のプランを決め、大人たちの前で披露。演劇で思いを伝える難しさや楽しさを学んだ。

同劇場では子どもたちの参加について「演劇の楽しさ、表現力を養う場になれば」と願う。「鳥の演劇祭10」は24日まで。（真田透）

▶ホームページに動画

日本海新聞
2017年（平成29年）10月6日
金曜日

生き抜く力 演劇で育む

鹿野小・中（鳥取市鹿野町）と青谷高（同市青谷町）で、演劇ワークショップを通じて自己表現力やコミュニケーション力向上を図る独自授業「トリジュク」が繰り広げられている。小中学校は、来春開校する県内初の義務教育学校・鹿野学園の新設学科「表鶯科」に向けた取り組み。地元の鳥の劇場メンバーが講師となり、青山学院大の研究ユニットがアドバイザーとして参加。関係者は「生き抜く力を育みたい」と期待する。（渡辺暁子）

鹿野小・中と青谷高　独自授業「トリジュク」

鳥の劇場と連携 先進例に

「こわれた千の楽器」に登場する楽器の気持ちを考える児童ら。中島代表（右から2人目）が講師となって進められた＝鳥取市鹿野町鹿野の鹿野小

トリジュクは本年度、鳥取県と日本財団の助成事業として鹿野小・中の3年生を対象に実施、研究ユニットが授業をサポートし、小中は4年生、鹿野中は1年生、青谷高は地域の方や子どもとの関わり方などを教員らと詳細に詰め、来年度以降の表鶯科に向けて態勢を整えていく。

青山学院大の知宿優文教授によると、高校で演劇を授業に取り入れる事例はあるが、小中学校では珍しい。また、学校では地元にあることもまれだという。

◆創造と協働

「もし自分が選れた楽器だったらどんな気分だろう？」。鹿野小で行われたワークショップ。鳥の劇場の中島代表ら4人に問い掛けた。題材は「国語で学習した『こわれた千の楽器』」だ。

児童は2、3人の組になってそれぞれチェロやハープ、太鼓などの楽器を表現する。この日は、組ごとに壊れた楽器の気持ちを考えて詩を書いてみた。「悲しい気持ちだと思う」「演奏できなくて悔しいかな。」自由に話し合う児童たち。「寝ぼけてガチャンと壊れた」「明の気持ちも動きを見つめ直すことまでがプロセスで終わらない。その後の『表現活動』で、子ども自身が活動を振り返り、自身や周りの成長を評価しなければならないため、教員の指導力向上を図っていく。

知宿教授は「学校と劇団がいっても連携できる環境は大きい。社会教育と学校教育がつながる先進例になる」と話す。

◆「省察活動」

授業はワークショップだけで終わらない。整理動作指導を行い、子どもが「表現活動」を通じて自身の考えを相手に伝える表現力を身に付けてほしい」という地域住民らの願いと、地域に密着した鳥の劇場の活動が噛み合った。「創造性と協働性の要素が分かりやすく入っている」と強調する。

尾行校長は「自分を見つめて歩む力につながる」と強調する。2020年度以降の次期新学習指導要領に掲げられる「主体的・対話的で深い学び」とも合致する。「学び」に期待が高まる。一方、来年度以降は教員自身が省察活動を指導し、個々の成長を評価しなければならないため、教員の指導力向上を図っていく。

知宿教授は「学校と劇団がいっても連携できる環境は大きい。社会教育と学校教育がつながる先進例になる」と話す。

セットだ。「自分のいろんな感情を余無的に見つめる時間、自分の気持ちを理解する力や人の気持ちを理解する力を育んでいく」（知宿教授）のが狙いだ。

鹿野小の浜津良副校長は「従来の教育では弱かった部分。殻を破って新しい力をつけてほしい」、鹿野中の村尾行校長は「自分を見つめて歩む力につながる」と強調する。

新学習指導要領に掲げられる「主体的・対話的で深い学び」とも合致する。「学び」に期待が高まる。一方、来年度以降は教員自身が省察活動を指導し、個々の成長を評価しなければならないため、教員の指導力向上を図っていく。

知宿教授は「学校と劇団がいっても連携できる環境は大きい。社会教育と学校教育がつながる先進例になる」と話す。

日本海新聞
2017年（平成29年）10月25日
水曜日

仏観客『トレビアン』

じゅう劇場、初の海外公演

フランスの観客を前に熱演する出演者たち＝23日、フランス・ナント市の国立現代芸術センター「リュ・ユニック」

共生の素晴らしさ熱演

演者手応え 自信の笑顔

フランス・ナント市で開かれた日仏障害者文化芸術国際交流事業「2017ジャパン×ナントプロジェクト」で、鳥の劇場（鳥取市鹿野町）がプロデュースし、障害のある人とない人が一緒になって舞台をつくる「じゅう劇場」が23日（日本時間24日）公演した。演目は「ロミオとジュリエット」から生まれたもの―2017」。初の海外公演で共に生きる素晴らしさを熱演し、フランスの観客を魅了した。（渡辺暁子）

プロジェクトは文化庁の委託事業として、全国の障害者団体などでつくる実行委員会やフランスの芸術団体が共同で企画。じゅう劇場は、舞台芸術公演の4団体の一つとして出演した。

シェークスピアの悲劇を原案に、対立する二つの家の間の壁と、「障害」と「健常」の間の壁を重ね合わせた脚本。出演者が考えた物語や実体験の語りも交えながら、障害の有無に関係なく人を愛することを表現した。会場の劇場リュ・ユニックには約300人が詰め掛け、笑いあり涙あり の熱演に大きな拍手を送った。

ナント在住のパスチアン・マスさん（32）は「障害があってもなくても、同じ人生を生きているのだと実感した。人間的でとても美しい」と感銘を受けた様子。

出演者で劇中の音楽も担当した井ぐち優太さん（32）は「とても手応えがあった。今まで以上に自信が付いた」と笑顔。鳥の劇場芸術監督の中島淳人さん（51）は「皆が支え合ってこれたからこそ、芸術都市であるナントとの交流を続けていくきっかけになれば」と話した。

第30回 山陰信販地域文化賞

あす米子で表彰式

山陰信販（米子市東福原2丁目、青山隆一社長）が山陰両県の地域文化向上に貢献した団体、個人を顕彰する第30回山陰信販地域文化賞の表彰式が29日、米子市東福原2丁目のホテルわこうである。受賞するのは島根県がしまね映画祭実行委員会（松江市殿町、勝部義夫実行委員長）、鳥取県がNPO法人「鳥の劇場」（鳥取市鹿野町鹿野、中島諒人代表理事）。活動と業績を紹介する。

しまね映画祭実行委員会（松江市殿町）

大スクリーンを身近に

各地へ作品届け四半世紀

さまざまな人々が、同じ空間で大スクリーンを見つめ、笑い、泣ける。しまね映画祭実行委員会は、映画祭が減った島根県内で、本来の鑑賞方法によって作品を味わってもらおうと、20年前からしまね映画祭を続けている。関係者の間では「日本一長い映画祭」として知られ、年年秋に約2カ月半にわたって各地で上映会を催している。

1990年代初め、映画館の減少に伴い「鑑賞の機会がなくなった」という県民の声を受け、映画に熱い思いを抱く有志が立ち上がったのが始まりだ。

俳優として映画出演の経験がある勝部義夫さん（83＝湖北ケーブルネットワーク社や山陰中央新報社で映画担当だった杉谷哲男さん（71）＝実行委員会代表理事＝が中心になって発足した。

92年に実行委の母体となる企画委員会を組織した。配給会社を交渉してフィルムを安く借りたり、映写機を地域の公共施設と持ち込んだりして、その年に第1回を開催。「映画をきっかけに」と8市町で外国映画を上映した。

会場を一カ所に限定しないスタイルはその後も続き、「島根方式」と呼ばれるようになった。市部だけでなく、山間部や離島の町村にもフィルムを届け、公用車の運転手兼映写技師として、「映画音痴」の近川良一さんは一四日帰りの出張を重ねた。「映画を通じて地域の人とつながる喜びがあった」と話す。

そこから受け入れられたのではないかと、四半世紀続く映画祭を評価する。

初回からずっと「現場」を支えてきた市原隼人さんは、「島根方式」が定着し、地域に根差した映画祭として定着していくことを願う。

「多彩な役作りを観客に提供し続けている実行委に敬意を表する」とたたえる。

鳥取県成人式（35）。

初めて映画に触れたのは2008年に始まった「しまね映画祭」の第1回。作品は、各会場の自主制作の作品で上映する。その他の上映は出雲市出身の映画監督・鈴織良成さんの作品。

鈴織さんは、「作品を通じて地域の人とつながる喜びがあった」とコメント。

映画祭開催時に上映するのが恒例だ。県外から参加する人も多く、地域活性化に一役買っている。

映画祭は昨年で25回を迎え、延べ354市町村で上映した。作品以上を上映し、来場者数は約7万人を超えた。全国には後継者不足から存続が危ぶまれる映画祭もあるというが、勝部さんは「島根には任せられる若手が育っている。いつ引退しても大丈夫だ」とうれしそう。

杉谷さんは「映画は多くの人たちと同じ瞬間、同じものを共有する。その瞬間がとても楽しい。映画の感想を言い合うだけでもいいし、また映画をきっかけに新たな場所を作り、映画を通じて発展していきたい」と思いを語る。

第24回しまね映画祭の閉幕イベント。大勢の来場者でにぎわった＝2015年11月、島根県邑南町淀原、町健康センター元気館

勝部義夫実行委員長

沿革

地域文化の振興を目指して官民で1992年にしまね映画祭企画委員会を結成し、94年にしまね映画祭実行委員会に改称。これまでに映画祭を26回、映画塾を15回行った。近年の映画祭来場者数は6千～7千人。映画館が東部の2館のみと偏在する島根県で、各地に鑑賞機会を提供している。

NPO法人「鳥の劇場」（鳥取市鹿野町）

人描く演劇の魅力発信

上演や養成 広がる出会い

NPO法人「鳥の劇場」は鳥取市鹿野町の廃校を改修した劇場を拠点に劇団員18人がボランティアの協力を受け、話題の上演作品を上演して本格始動。08年に活動を通明化しようとNPO法人化した。

「一般社会との中人間の素晴らしさを共有する劇団」、「地域の必要性を認識してもらいたい」という、中島代表理事の信念の下、人と一緒に何かしたい」と市民の海外公演にも取り組む。

これまでに60以上の作品を上演してきた。ジャンルを問わず、さまざまな社会問題に切り込んだ作品を手がけ、数多くの人に自分と異なる立場に置かれた人々を想像してもらえるよう内容を一貫して作品作りをテーマとして掲げる。

日常生活の中に演劇が存在するよう広めようと、13年に立ち上げたこどもの劇場では、県内外に出向き、「根河鉄道の夜」などの作品を公演してきた。当初は、公演した劇場がなかなかあって苦しむこともあったが、舞台上で自分と同じ一四歳の少年が育っているのを見ると、今年10月には第20回を迎えた。

団員の姿が感動を呼び、今年10月には、フランス・ナンシーでの公演が決まった。

08年からは年に一度のお祭りとして「海外の劇場」を招いた国内有数の演劇祭「鳥の演劇祭」を開催。今年9月に第10回を迎えた。

町中に仮設の劇場を組み、用意して来場者に町歩きも楽しんでもらえる内容で、例年1万5千人を呼び込んでいる。

「地域の人々が好意的に受け入れてくれたこと10年続けられた要因」と感謝し、出会う喜びこそ発展を誓う。

昨年で鳥取市立10周年の節目を迎えた。10年間を通じ、地元住民への認知度の高まりを感じるとともに、演劇祭を通じた人の出会いの拡大にも手応えをつかむ。今後は中国、韓国などで行ってきた海外公演の機会を増やすとともに、演劇者との演劇上演の可能性を探る。中島代表理事は「これからも楽しみながら考えさせられる作品づくりを目指したい」と熱を込める。

9月の「鳥の演劇祭10」でオープニングを飾った「NIPPON・CHA！CHA！CHA！」（鳥の劇場提供）

中島諒人代表理事

沿革

2008年に結成した演劇集団。廃校を改修した劇場で約60作品を上演したほか、小中学校でのワークショップや寄宿舎の劇団生活を通じて人と交流する。08年からは年1回、海外の劇団を招いた演劇祭を開き、地元のにぎわいづくりにも貢献している。

山陰中央新報
2017年（平成29年）11月28日
火曜日

日本海新聞
2018年（平成30年）2月3日
土曜日

演劇と社会 在り方考察

鳥の劇場で若手演劇人発表

鳥取市鹿野町鹿野の鳥の劇場（中島諒人代表）で1月28日、若手演劇人による研修発表会があった。東京で活動する演出家と劇作家が実際の劇場を題材にするなどして、演劇が社会に果たす役割や今後の在り方を考えた。

文化庁の「若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業」の一環。

参加者は1週間程度鳥の劇場に滞在し、自分が芸術監督になった想定で構想を発表し、研修を通して感じたことを述べる若手演劇人ら

自分が芸術監督になった想定で構想を発表し、研修を通して感じたことを述べる若手演劇人ら

と想定して劇場の事業や運営を考察。最終日のこの日、5人が地域住民ら観客約50人を前に構想を披露した。

富山市の公共ホールを題材にした劇作家の綾真季さんは「舞台作品の感想を共有する場所がない」として、ロビースペースの充実やホール外の活動を提案。演出家の岩沢哲野さんは、孤独死が問題となっている千葉県松戸市の団地を舞台に劇場を結成し、「演劇を通して地域コミュニティーの創造を図りたい」と発表した。

中島代表が審査員を務めた「利賀演劇人コンクール2017」で優秀演出家賞を受賞した松村翔子さん演出の作品上演もあった。

中島代表は「演劇がどういう立場で社会と関わるかを考える機会になれば」と話した。

日本海新聞
2018年（平成30年）2月13日
火曜日

ぶんか

鳥の劇場「三文オペラ」

非常識化する日常を皮肉る

鹿野で17・18日、23－25日上演

二束三文という言葉があるように、三文とは価値なしの意味。三文芝居となると、インチキでだめな芝居。『三文オペラ』は、「オペラ」という高級な娯楽（過去も今も富裕層のためにある。だってチケットが高いでしょ！）に、「三文」とつけたところに、作者ブレヒトの皮肉や挑発を見ることができる。

ブレヒト（独 1898～1956年）は、演劇の世界では、ものすごく有名。全てを支配する社会で、なりふり構わず立身出世しようとする新興市民の姿を、強盗や殺人を繰り返す犯罪者に重ね、さまざまな悪辣な人々も含めながら、世界の過酷な現実を容赦なく浮かび上がらせる。第一次世界大戦後のドイツの状況への批判が作者の意図だが、それは現在の日本ではますます有効に思える。

手を替え品を替え語られるメッセージ、「人間は酷薄な存在。それは人間の本性。その残酷が、社会システムにより、強烈に助長されている。だから、この世に不正と悲しみがあふれることは必定で、もはや甘んじて受け入れるしかない。」

最終幕、大衆に見放され死刑台に立つ主人公だが、王により唐突に恩赦を与えられ、城や年金を与えられ貴族となることが決まる。物語の中でしか起こらない その中でも代表作。お金が支配する社会で、その過酷な現実を容赦なく浮かび上がらせる。第一次世界大戦後のドイツの状況への批判が作者の意図だが、それは現在の日本ではますます有効に思える。

手を替え品を替え語られるメッセージ、「人間は酷薄な存在。それは人間の本性。その残酷が、社会システムにより、強烈に助長されている。だから、この世に不正と悲しみがあふれることは必定で、もはや甘んじて受け入れるしかない。」

最終幕、大衆に見放され死刑台に立つ主人公だが、王により唐突に恩赦を与えられ、城や年金を与えられ貴族となることが決まる。物語の中でしか起こらない茶番劇、ギャグの最たるものようにも見える。けれど、21世紀の現実世界の、何でもありのちゃぶ台返し的状況と比較するとき、それは決して非現実ではない。というか、我々の日常が非現実化、非常識化している。

今回は、銀行のロビーコンサートという仕立ての中で、生演奏があり、俳優たちが演じ歌う。どんな大雪でもやります！

（中島諒人・鳥の劇場芸術監督）

「三文オペラ」の一場面

◇鳥の劇場「三文オペラ」は17、18の両日と23～25日、午後2時から、鳥取市鹿野町鹿野の鳥の劇場で。大人2千円、18歳以下500円、中学生以下無料。予約・問い合わせは電話0857(84)3268、同劇場へ。

◆鳥の劇場発表公演「つくる高校生」「小鳥の学校」

高校生の演劇力を高めるべく開始した「つくる高校生」。今回、演じる作品はソーントン・ワイルダー作『わが町』。また、考える子ども、行動する子どもを目指す場「小鳥の学校」。演じる作品は『少年たちとおじさんたちの奇跡の生還』。「つくる高校生」公演は24日16時、25日12時。「小鳥の学校」公演は24日12時、25日16時。鳥取市鹿野町の「鳥の劇場」で。問い合わせは☎0857・84・3268へ。

公明新聞
2018年（平成30年）3月23日
金曜日

東京・渋谷ヒカリエでイベント

とっとりの魅力を発信

鳥取の魅力を発信したイベントの模様（東京・渋谷　昨年12月）

鳥取のいいものを集めた会場内のセレクトショップ

文化、歴史、芸術や暮らしの価値アピール

たまに東京に行くと、変化の速さに驚く。学生時代から20年間東京で暮らし、離れて10年以上経過する。もはやいろんなことが変わりすぎ、特に渋谷など、もう混乱してしまう。一番親しんだ街だったが、見慣れた景色と新しいビルや通路のミックスに、脳内の回路がうまくついていけない。

その渋谷、ヒカリエで、鳥取県の魅力を発信するイベントが昨年末に開催された。主催は鳥取県。人口最少県として、移住者獲得に熱心で、確実に成果をあげている。この事業では、私ども鳥の劇場がホスト役となり、鳥取の文化や歴史、芸術、暮らしの価値をアピールし、鳥取ファンを増やし、願わくば移住者を獲得しようというねらい。私もUターン組、劇場スタッフにも県外出身者が多い。鳥取に暮らしつつ、外部の視点も持てるという立場から、プログラムを考えた。

4回目開催で、昨年は新橋にある鳥取県のアンテナショップを会場とした。今回は、より幅広く発信をということで、渋谷を選び、中でもおしゃれ度の高いヒカリエを会場として、感度の高い層への鳥取の浸透を企図した。題して「とっとりを知ってもらう3日間」。

トークイベントでは、民藝と日本酒の魅力を語ってもらい、自然と共に生きる山陰の生活の魅力を伝えた。柳宗悦、濱田庄司などの名で知られる民藝運動だが、鳥取の吉田璋也が、現在もつながるさまざまなものづくりの伝統を始めたことは、全国的にはあまり知られていない。酒米作りからこだわった鳥取の酒の話も、多くの人をうならせ、話の後の試飲は、場を大いに盛り上がらせた。

鳥取出身の宇宙ビジネスの起業家と写真家の話も新鮮だった。鳥取は夜空が美しく、どこからでも星がよく見える。最近は「星取県」を目標している。何かと忙しい日常の中、夜空を眺め、人間存在を大きく超えた時間や空間を思うことは、とても意味あることだ。写真家は、鳥取の和紙に家族写真をプリントする試みを紹介。写真家、紙すき職人、印刷機メーカーの三者による協力は、コミュニティーの小さい鳥取だからこそ可能な現代的で先端的なコラボだ。

鳥の劇場は、鳥取の小中学校を中心に行なっている演劇を用いたワークショップ実践を紹介。飛び入りで参加してくれた家族もあり、体と想像力を使って遊び、コミュニケーションすることの喜びを分かち合った。

2006年に活動を始めた鳥の劇場。鳥取の魅力を伝えるイベントを東京でやることになるとは、当初思いもしなかった。人が生きる意味とか、幸福をどう考えるかについて、大きな変化が起こっている。モノを手に入れることが幸せというシンプルな時代は終わりつつある。経済という化け物が、その延命と力のさらなる伸長を自論んで天上と地下に拡大を続ける渋谷で、化け物へのさやかな抵抗を試みた3日間だった。

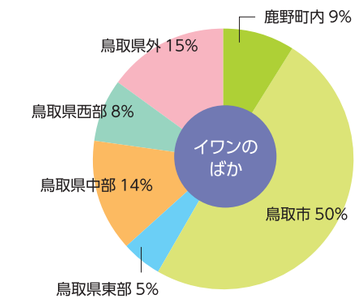
（かがしま・まこと）

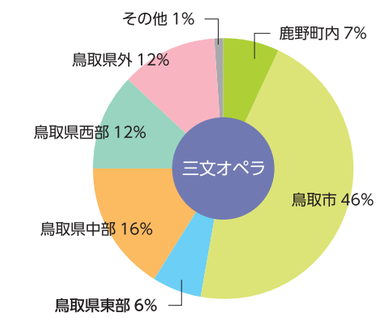
公明新聞
2018年（平成30年）1月19日
金曜日

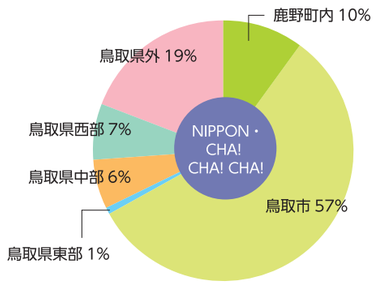
【資料1】鳥の劇場　2017年度プログラム　観客アンケート集計結果

	イワンのばか		若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業		三文オペラ			高校演劇もっと盛り上げ事業 つくる高校生『わが町』		小鳥の学校『少年たちとおじさんたちの奇跡の生還』	
観客総数	840		57		740			161		317	
アンケート数	427		13		284			39		64	
アンケート回収率		50.8%		22.8%		38.4%			24.2%		20.2%
【1】どうやってお知りになりましたか?(複数回答可)											
総回答者数	420	98.4%	12	92.3%	243	85.6%		35	89.7%	60	93.8%
鳥の劇場からの案内											
鳥の劇場からの郵便	123	29.3%	6	50.0%	99	40.7%		10	28.6%	10	16.7%
鳥の劇場からのメール	69	16.4%	1	8.3%	38	15.6%		4	11.4%	4	6.7%
鳥の劇場での案内	48	11.4%	3	25.0%	8	3.3%		4	11.4%	10	16.7%
チラシ・ポスター											
街なか(チラシ・ポスター)	127	30.2%	1	8.3%	46	18.9%		1	2.9%	3	5.0%
駅(チラシ・ポスター)	55	13.1%	0	0.0%	8	3.3%		1	2.9%	0	0.0%
学校(チラシ・ポスター)	105	25.0%	0	0.0%	9	3.7%		7	20.0%	13	21.7%
他の施設[劇場・美術館](チラシ・ポスター)	64	15.2%	2	16.7%	26	10.7%		0	0.0%	0	0.0%
他の公演(チラシ・ポスター)	58	13.8%	0	0.0%	4	1.6%		0	0.0%	0	0.0%
その他の場所	53	12.6%	1	8.3%	7	2.9%		0	0.0%	2	3.3%
各種メディア											
Webサイト	17	4.0%	1	8.3%	7	2.9%		1	2.9%	0	0.0%
SNS[twitter・Facebook]	38	9.0%	1	8.3%	12	4.9%		3	8.6%	4	6.7%
新聞	28	6.7%	0	0.0%	29	11.9%		0	0.0%	1	1.7%
ラジオ[トリラジ!]	14	3.3%	0	0.0%	4	1.6%		1	2.9%	1	1.7%
その他	79	18.8%	1	8.3%	42	17.3%		11	31.4%	20	33.3%
公演を知ったきっかけ(記述回答)	小学校の息子に勧められて、知人の誘い、出演者の誘い、先生の紹介、旅の途中に立ち寄った、口コミ				友人の誘い、通りがかり			娘からの紹介、出演者から、友人から		出演者の家族、友人の紹介	
【2】現在のお住まいはどちらですか?											
総回答数	425	99.5%	13	100.0%	279	98.2%		38	97.4%	64	100.0%
鹿野町内	39	9.2%	0	0.0%	20	7.2%		2	5.3%	4	6.3%
鳥取市内	213	50.1%	8	61.5%	128	45.9%		23	60.5%	26	40.6%
鳥取県内東部	20	4.7%	1	7.7%	17	6.1%		6	15.8%	8	12.5%
鳥取県内中部	58	13.6%	3	23.1%	44	15.8%		5	13.2%	12	18.8%
鳥取県西部	33	7.8%	1	7.7%	34	12.2%		1	2.6%	8	12.5%
鳥取県外	62	14.6%	0	0.0%	33	11.8%		1	2.6%	4	6.3%
その他	0	0.0%	0	0.0%	3	1.1%		0	0.0%	2	3.1%
県外内訳	愛知1 愛媛2 大阪5 岡山28 京都1 高知1 滋賀3 島根7 東京1 兵庫5 広島3 北海道3 横浜1				大阪2 岡山8 神奈川1 島根4 兵庫10 広島1 岡山1					岡山 1 東京 1 兵庫 1	
【3】性別											
総回答数	423	99.1%	13	100.0%	280	98.6%		38	97.4%	64	100.0%
女性	275	65.0%	4	30.8%	170	60.7%		20	52.6%	43	67.2%
男性	145	34.3%	8	61.5%	110	39.3%		17	44.7%	20	31.3%
その他	1	0.2%	1	7.7%	0	0.0%		0	0.0%	1	1.6%
【4】年齢											
総回答数	425	99.5%	13	100.0%	278	97.9%		38	97.4%	64	100.0%
10歳未満	20	4.7%	0	0.0%	4	1.4%		2	5.3%	5	7.8%
10代	55	12.9%	3	23.1%	22	7.9%		14	36.8%	11	17.2%
20代	56	13.2%	0	0.0%	28	10.1%		0	0.0%	0	0.0%
30代	79	18.6%	5	38.5%	36	12.9%		6	15.8%	9	14.1%
40代	56	13.2%	1	7.7%	41	14.7%		5	13.2%	22	34.4%
50代	70	16.5%	2	15.4%	53	19.1%		6	15.8%	8	12.5%
60代	63	14.8%	2	15.4%	61	21.9%		2	5.3%	2	3.1%
70代	20	4.7%	0	0.0%	25	9.0%		2	5.3%	7	10.9%
80代以上	6	1.4%	0	0.0%	8	2.9%		1	2.6%	0	0.0%
【5】来場経験											
総回答数	426	99.8%	13	100.0%	272	95.8%		37	94.9%	62	96.9%
来場したことがある	279	65.5%	13	100.0%	214	78.7%		26	70.3%	36	58.1%
今回が初めて	146	34.3%	0	0.0%	58	21.3%		11	29.7%	26	41.9%
【6】年にどれくらい来場されますか?											
総回答数	227	53.2%	11	84.6%	197	69.4%		19	48.7%	32	50.0%
1回	50	22.0%	1	9.1%	47	23.9%		2	10.5%	8	25.0%
2〜3回	129	56.8%	4	36.4%	100	50.8%		12	63.2%	13	40.6%
4回以上	33	14.5%	5	45.5%	36	18.3%		4	21.1%	9	28.1%
その他	14	6.2%	0	0.0%	14	7.1%		1	5.3%	2	6.3%

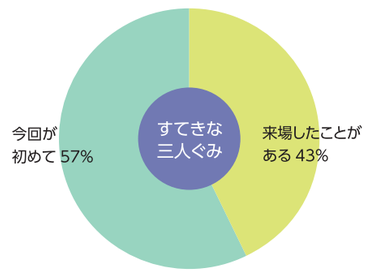
観客居住地







来場経験



鳥の演劇祭内での主催公演

	演劇祭10 『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』		演劇祭10 高校演劇もっと盛り上げ事業 『春のめざめ』		演劇祭10 じゆう劇場「ロミオとジュリエット」から 生まれたものー2017」	
観客総数	302		139		147	
アンケート数	72		45		96	
アンケート回収率		23.8%		32.4%		65.3%
【1】どうやってお知りになりましたか?(複数回答可)						
総回答者数	68	94.4%	43	95.6%	40	41.7%
鳥の劇場からの案内						
鳥の劇場からの郵便	29	42.6%	10	23.3%	11	27.5%
鳥の劇場からのメール	11	16.2%	3	7.0%	0	0.0%
鳥の劇場での案内	4	5.9%	3	7.0%	0	0.0%
チラシ・ポスター						
街なか(チラシ・ポスター)	9	13.2%	8	18.6%	6	15.0%
若桜街道ペナント	3	4.4%	4	9.3%	5	12.5%
駅(チラシ・ポスター)	0	0.0%	1	2.3%	0	0.0%
列車内(ポスター)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
鳥取空港(ポスター)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学校(チラシ・ポスター)	3	4.4%	5	11.6%	0	0.0%
他の公演(チラシ・ポスター)	2	2.9%	0	0.0%	2	5.0%
新聞折込チラシ	0	0.0%	0	0.0%	2	5.0%
郵便局(ポスター)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
他の施設[劇場・美術館](チラシ・ポスター)	5	7.4%	0	0.0%	1	2.5%
その他の場所	3	4.4%	0	0.0%	2	5.0%
各種メディア						
Webサイト	6	8.8%	6	14.0%	8	20.0%
SNS[twitter・Facebook]	6	8.8%	2	4.7%	4	10.0%
新聞	13	19.1%	7	16.3%	4	10.0%
鳥まとめ	1	3.4%	0	0.0%	1	9.1%
ラジオ[トリラジ!]	0	0.0%	0	0.0%	3	7.5%
地方情報誌広告(つばさ・くらら・こはく)	0	0.0%	0	0.0%	1	2.5%
演劇情報誌(演劇ぶっく・シアターガイド)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	15	22.1%	23	53.5%	11	27.5%
公演を知ったきっかけ(記述回答)	出演者から、鹿の芸術祭の会場、一心庵、知人の紹介、家族の紹介		出演者から、家族から		出演者より、NO-MAより、家族から	
【2】現在のお住まいはどちらですか?						
総回答数	72	100.0%	44	97.8%	47	49.0%
鹿野町内	7	9.7%	6	13.6%	2	4.3%
鳥取市内	41	56.9%	30	68.2%	19	40.4%
鳥取県東部	1	1.4%	6	13.6%	4	8.5%
鳥取県中部	4	5.6%	1	2.3%	4	8.5%
鳥取県西部	5	6.9%	1	2.3%	6	12.8%
鳥取県外	14	19.4%	0	0.0%	11	23.4%
その他	0	0.0%	0	0.0%	1	2.1%
県外内訳	岡山6 広島1 高知1 山口2 東京1 兵庫1 和歌山1				岡山1 京都1 高知1 大阪2 島根2 福井1 兵庫1	
【3】性別						
総回答数	72	100.0%	45	100.0%	47	49.0%
女性	36	50.0%	32	71.1%	29	61.7%
男性	35	48.6%	13	28.9%	18	38.3%
その他	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
【4】年齢						
総回答数	72	100.0%	44	97.8%	47	49.0%
10歳未満	3	4.2%	0	0.0%	1	2.1%
10代	3	4.2%	15	34.1%	2	4.3%
20代	9	12.5%	0	0.0%	8	17.0%
30代	7	9.7%	5	11.4%	5	10.6%
40代	9	12.5%	8	18.2%	8	17.0%
50代	16	22.2%	7	15.9%	15	31.9%
60代	19	26.4%	7	15.9%	6	12.8%
70代	6	8.3%	2	4.5%	0	0.0%
80代以上	0	0.0%	0	0.0%	2	4.3%
【5】来場経験						
総回答数	68	94.4%	44	97.8%	48	50.0%
来場したことがある	53	77.9%	19	43.2%	28	58.3%
今回が初めて	15	22.1%	25	56.8%	20	41.7%
【6】年にどれくらい来場されますか?						
総回答数	48	66.7%	16	35.6%	18	18.8%
1回	5	10.4%	5	31.3%	4	22.2%
2〜3回	30	62.5%	7	43.8%	10	55.6%
4回以上	12	25.0%	3	18.8%	4	22.2%
その他	1	2.1%	1	6.3%	0	0.0%

倉吉公演

	じゆう劇場 『「ロミオとジュリエット」から 生まれたものー2017』倉吉公演		とっとり中部応援プロジェクト 家族でみよう! 「すてきな三にんぐみ」	
観客総数	166		557	
アンケート数	96		168	
アンケート回収率		57.8%		30.2%
【1】どうやってお知りになりましたか?(複数回答可)				
総回答者数	92	95.8%	165	98.2%
鳥の劇場からの案内				
鳥の劇場からの郵便	17	18.5%	12	7.3%
鳥の劇場からのメール	7	7.6%	2	1.2%
鳥の劇場での案内	12	13.0%	3	25.0%
チラシ・ポスター				
街なか(チラシ・ポスター)	15	16.3%	13	7.9%
駅(チラシ・ポスター)	5	5.4%	11	6.7%
学校(チラシ・ポスター)	7	7.6%	145	87.9%
他の施設[劇場・美術館](チラシ・ポスター)	6	6.5%	14	8.5%
他の公演(チラシ・ポスター)	6	6.5%	14	8.5%
その他の場所	18	19.6%	16	9.7%
各種メディア				
Webサイト	7	7.6%	0	0.0%
SNS[twitter・Facebook]	6	6.5%	3	1.8%
新聞	–	–	–	–
ラジオ[トリラジ!]	6	6.5%	0	0.0%
その他	10	10.9%	4	2.4%
公演を知ったきっかけ(記述回答)	出演者から、口コミ		飲食店、公民館	
【2】現在のお住まいはどちらですか?				
総回答数	95	99.0%	165	98.2%
鹿野町内	33	34.7%	81	49.1%
鳥取市内	21	22.1%	–	–
鳥取県内東部	1	1.1%	–	–
鳥取県内中部	29	30.5%	84	50.9%
鳥取県西部	8	8.4%	–	–
鳥取県外	3	3.2%	–	–
その他	0	0.0%	–	–
県外内訳	神奈川 1 岡山 2			
【3】性別				
総回答数	95	99.0%	164	97.6%
女性	75	78.9%	117	71.3%
男性	20	21.1%	45	27.4%
その他	0	0.0%	0	0.0%
【4】年齢				
総回答数	95	99.0%	167	99.4%
10歳未満	0	0.0%	31	18.6%
10代	14	14.7%	29	17.4%
20代	6	6.3%	2	1.2%
30代	6	6.3%	40	24.0%
40代	7	7.4%	49	29.3%
50代	21	22.1%	7	4.2%
60代	22	23.2%	1	0.6%
70代	15	15.8%	2	1.2%
80代以上	3	3.2%	0	0.0%
【5】来場経験				
総回答数	95	99.0%	167	99.4%
来場したことがある	44	46.3%	48	28.7%
今回が初めて	51	53.7%	119	71.3%
【6】年にどれくらい来場されますか?				
総回答数	36	37.5%	41	24.4%
1回	9	25.0%	15	36.6%
2〜3回	18	50.0%	13	31.7%
4回以上	5	13.9%	7	17.1%
その他	4	11.1%	6	14.6%

【資料2】鳥の劇場　2017年度収支決算

■収入の部

単位：円／%

	2017年度		2016年度		比較
科目	決算額(a)	構成比	決算額(b)	構成比	(a)−(b)
チケット収入・受講料	3,912,500	4.3%	2,342,000	2.4%	1,570,500
外部上演料・講師料・出演料等	11,645,382	12.8%	8,758,860	8.9%	2,886,522
受託費	25,772,500	28.3%	27,627,620	28.0%	△ 1,855,120
鳥カフェ・物販売上	1,066,164	1.2%	310,190	0.3%	755,974
雑収入	1,569,242	1.7%	4,260,633	4.3%	△ 2,691,391
寄付金（サポーター）※1	2,920,000	3.2%	6,905,000	7.0%	△ 3,985,000
寄付金（企業協賛ほか）※2	4,000	0.0%	1,034,000	1.0%	△ 1,030,000
助成金・補助金　※3	44,243,893	48.5%	47,496,159	48.1%	△ 3,252,266
合計(A)	91,133,681	100.0%	98,734,462	100.0%	△ 7,600,781

※1　2016年度:430人/1398口、2017年度:214人/584口（人数には団体や法人を含む）
2016、2017年度ともに、公益社団法人企業メセナ協議会の助成認定制度を活用した寄付金含む
（2017年度:100,000円）
※2　2016年度は、企業メセナ協議会の助成認定制度を活用した寄付金を含む
※3　2016年度のP52とP53の差額（55,575円）は、参加者の代理で申請したために生じている

■支出の部

単位：円／%

		2017年度		2016年度		比較
科目		決算額(a)	構成比	決算額(b)	構成比	(a)−(b)
事業費	メンバー人件費	34,899,268	35.3%	35,146,650	35.8%	△ 247,382
	その他	46,898,109	47.4%	45,611,447	46.4%	1,286,662
管理費・その他		17,125,375	17.3%	17,507,503	17.8%	△ 382,128
合計(B)		98,922,752	100.0%	98,265,600	100.0%	657,152
収支差額(A)−(B)		△ 7,789,071		468,862		

■助成金・補助金内訳

単位：円／%

	2017年度		2016年度		比較
科目	決算額(a)	構成比	決算額(b)	構成比	(a)−(b)
ごうぎん鳥取文化振興財団	100,000	0.23%	0	0.00%	100,000
文化庁　*1	28,631,893	64.71%	16,548,656	34.80%	12,083,237
鳥取県　*2	0	0.00%	80,400	0.17%	△ 80,400
鳥取県　*3	0	0.00%	8,274,000	17.40%	△ 8,274,000
鳥取県　*4	0	0.00%	22,268,678	46.83%	△ 22,268,678
鳥取県　*5	0	0.00%	45,000	0.09%	△ 45,000
山陰・夢みなと博覧会記念基金	197,000	0.45%	335,000	0.70%	△ 138,000
鳥取県　*6	1,000,000	2.26%	0	0.00%	1,000,000
鳥取県　*7	14,315,000	32.35%	0	0.00%	14,315,000
合計	44,243,893	100.00%	47,551,734	100.00%	△ 3,307,841

*1　「劇場・音楽堂等活性化事業」
*2　「芸術・文化に親しみやすい環境整備支援補助金」
*3　「平成28年度アートピアとっとり地域モデル創生事業補助金」
*4　「平成28年度鳥取県障がい者と健常者が共につくる芸術事業費補助金」
*5　国際航空便利用促進費（定期便）　（日韓高校生交流キャンプ　華川）
*6　鳥取県震災復興活動特別支援事業補助金
*7　「平成29年度文化芸術地域モデル全国発信事業補助金」

■鳥の劇場運営委員会への補助金

◎「鳥の演劇祭10」・表現WS「トリジュク」
鳥取県「鳥の劇場運営委員会補助金」　35,462,555円
※文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」からの補助金を含む
鳥取市「鳥の演劇祭10開催補助金」　1,000,000円
日本財団補助金　3,000,000円

◎「鳥の演劇祭等の情報発信強化（舞台芸術拠点創造事業）業務」　1,986,748円

◎「じゆう劇場」
鳥取県「鳥取県障がい者と健常者がともに作る芸術事業補助金」　22,063,523円
※文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」からの補助金を含む

鳥の劇場
鳥のカフェ
『三文オペラ』